

マイケル・タウシグの厄払い的な記述

ナーヴァス・システム、民族誌とフィクションあるいは日記、
フィクトクリティシズム¹

林 真²

はじめに

エスノグラフィー³とフィクションの関係について考えるにあたり、本論文では、文化人類学者マイケル・タウシグ (1940-) の〈記述〉⁴ についての思想を追うことになる。その際、ナーヴァス・システム、民族誌とフィクション、民族誌と日記、フィクトクリティシズムという四つの観点に注目する。まず第 1 章ではタウシグについての簡単な紹介をおこなったのち、タウシグがフィールドとするコロンビアの政治状況について概観する。第 2 章ではタウシグの思想の根幹ともいえる「ナーヴァス・システム」の概念について検討する。「ナーヴァス・システム」は第 3 章以降でも議論を貫くものとして各所で登場することになる。第 3 章では民族誌とフィクションの観点からタウシグの文章、特に 2006 年に刊行された『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』 (*Walter Benjamin's Grave*) 所収の「アメリカを構築すること」について詳しくみてゆくことになる。第 4 章ではタウシグがマリノフスキの日記について書いた文章をもとに、民族誌と日記の関係について確認する。その上で、タウシグが〈日記的なもの〉とでも呼べる概念を重視していることを明らかにする。第 5 章では、ゲリット・ハースがおこなった議論をもとに、フィクトクリティシズムと呼ばれる学問的実験のあり方からタウシグの記述のあり方を振り返ることになる。ハースはフィクトクリティシズムについての彼の著作の中で、タウシグの「コーン・ウルフ」という文章を重視している。本論文の主題にある「厄払い的な記述」という言葉は、この「コーン・ウルフ」に登場するものである。「厄払い的な記述」は「ナーヴァス・システム」とのつらなりの中で、タウシグの記述的实践の特徴を端的に表すものとして説明されることにな

¹ 本論文は、2020 年 2 月に明治大学理工学研究科 建築・都市学専攻 総合芸術系に提出した修士学位請求論文「ナーヴァス・システムと日記——マイケル・タウシグは『非常事態』にどう対処するか？」および 2020 年 8 月 8 日に開催されたエスノグラフィーとフィクション研究会第 1 回研究発表会での口頭発表「フィクトクリティシズム的エスノグラフィーの試みとマイケル・タウシグの記述的戦略」をもとにしている。

² 独立研究者。mail: soy.m.hayashi@gmail.com

³ 本論文で扱う「エスノグラフィー」は主に文化人類学の分野との関連で著されたものであることが多い。よって本論文では以降、「民族誌」という訳語を用いることにする。これは、本論文で扱う「エスノグラフィー」が、狭義の文化人類学的論文および、批判的にであれそれを前提としたものであることを示唆するためである。

⁴ 本論文では、筆者独自の強調や概念、本論文内からの引用について、山括弧を使用することとする。

る。

第 6 章は、タウシグの記述的实践をフィクトクリティカルなものとして理解した筆者自身による、フィクトクリティシズム的な文章が提示される。この第 6 章が本論文にとって必要なものであることは、第 1 章から第 5 章によって示されるだろう。

1 マイケル・タウシグとコロンビア

まず、タウシグについて簡単に紹介したい。ヨーロッパ・グラデュエート・スクールのウェブサイトに掲載されている経歴は以下のようになっている。

マイケル・タウシグ (1940 年生) は、その挑発的な民族誌研究とアカデミズムの型を破るスタイルで知られる文化人類学者である。彼は 1940 年にオーストラリアで生まれ、その後、シドニー大学で医学を学んだ。そして、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで文化人類学の博士号を取得した。彼は現在、ニューヨークのコロンビア大学とスイスのヨーロッパ・グラデュエート・スクール (EGS) における文化人類学の教授である。彼は自らの専門分野、特に医療人類学について多数の書籍を出版しているが、彼がもっとも称賛されているのは、特に物神崇拜の概念に関連した、カール・マルクスとヴァルター・ベンヤミンについての評論である⁵。

学歴についてはコロンビア大学人類学科のウェブサイトが詳しく、1964 年にシドニー大学から医学学士、1969 年にロンドン・スクール・オブ・エコノミクスから社会学修士、1974 年にロンドン大学から博士号を得ている⁶ (ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスはロンドン大学の一部)。また、2005 年に行われたインタビューに先立ち、デイヴィッド・レヴィ・ストロースは職歴も含め、さらに詳しい経歴をまとめている⁷。それによると、タウシグは学士を取得した後、シドニー大学附属病院で 1 年間医師として勤務し、さらに 6 年間、一般診療部門で勤務した。その後、精神医学のレジデントとしてロンドンの精神科病院で働きつつ、修士号の取得を目指した。そして 1969 年にロンドン大学のラテンアメリカ研究所からリサーチフェローに任命され、「『革命に参加する』ため、この年の 9 月にコロンビアに向かった」とあるので、これは

⁵ “Michael Taussig.” *The European Graduate School*, The European Graduate School / EGS, <https://egs.edu/faculty/michael-taussig>. なお、以下で英語文献からの引用を行う場合、特に断りのある場合を除き、筆者が日本語に訳した文章を記載している。また、原文の言語を問わず、脚注に邦訳の書誌情報が記載されている場合は、その邦訳から引用している。

⁶ “Michael T. Taussig.” *Department of Anthropology*, Columbia University, <https://anthropology.columbia.edu/content/michael-t-taussig>.

⁷ David Levi Strauss and Michael Taussig. “The Magic of the state: An Interview with Michael Taussig.” *Cabinet*, Immaterial Incorporated, <http://www.cabinetmagazine.org/issues/18/strauss.php>.

修士号の取得後のことだったのであろう。インタヴューは「そこで見たものが、彼の興味を惹きつけた。そしてコロンビア、プタマヨ[ママ]、ベネズエラにおける彼のフィールドワークはその後 40 年以上に渡って続くことになった。彼の博士論文⁸（主査はジュリアン・ピット＝リヴァーズ）は、農業の商業化が持つ社会文化的インパクトを調査し、1975 年にスペイン語で出版された」と続ける。その後、彼はミシガン大学の文化人類学科で教え、1988 年にはニューヨーク大学でパフォーマンス・スタディーズの教壇に立つ。そして 1993 年⁹には現職に就いたようである。

上でもみたように、タウシグが初めてフィールドワークとしてコロンビアを訪れたのは 1969 年である。そしてそれから毎年、タウシグはコロンビアに戻っている¹⁰。そのように長年コロンビアとかかわりを持ってきたタウシグの思想は、コロンビアにおける暴力の問題と密接に結びついているといえる。1969 年当時、コロンビアは左翼ゲリラ組織と極右民兵組織の抗争が麻薬の問題を伴いつつ続く混乱（コロンビア内戦）の最中であつた。そしてその影響は、現代のコロンビアにまで続いている。コロンビアの政治状況について論じるのは本論文の主題ではないが、議論の前提として、それを共有することは重要であると考えられる。よって以下では、ラテンアメリカ地域研究者の千代勇一の文章をもとにして、スペインからの独立戦争を起点に、コロンビア内戦の背景を簡潔にまとめておきたい。

基本的に、スペインからのコロンビアの独立はシモン・ボリバルの功績であるとされている。1819 年 8 月 7 日、ボリバルはボヤカの戦いでスペイン王党派に勝利し、グラン・コロンビア¹¹の初代大統領に選出された。千代によれば、「現在、8 月 7 日はボヤカ戦勝記念日として[コロンビアの]祝日となっているだけではない。4 年に 1 度の大統領の就任式も、7 月 20 日の独立記念日ではなく 8 月 7 日に執り行われるのである。また、国会議事堂などに囲まれた首都ボゴタの中心広場もボリバル広場（プラサ・ボリバル）と呼ばれている」¹²。このように、ボリバルは現在も独立の英雄という扱いを受けている。しかしながら、歴史学者の清水透が言うように、ボリバルら独立の指揮者となったクリオーリョ¹³たちが「植民地性に裏打ちされた、白色国民国家構想」¹⁴とでもいうような思想を共有していたことには注意を払わなければならない。彼らはヨー

⁸ この論文のタイトルは“Rural Proletarianization; A Social and Historical Enquiry into the Commercialization of the Southern Cauca Valley, Colombia”であり、大英図書館が運営するウェブサイト EThOS からダウンロードすることができる。

⁹ ニューヨーク大学、コロンビア大学それぞれへ所属した年については、Eakin, Emily. “Anthropology's Alternative Radical.” *The New York Times*. 2001, <https://www.nytimes.com/2001/04/21/arts/anthropology-s-alternative-radical.html>. を参考にした。

¹⁰ 2020 年現在の最新の著作においても、タウシグは毎年コロンビアを訪れていることを記している (Taussig, Michael. *Mastery of Non-Mastery in the Age of Meltdown*. U of Chicago P. 2020, p. 36.).

¹¹ 「現在のコロンビア共和国と区別するため、グラン・コロンビアあるいは大コロンビアと呼ばれている。その名にふさわしく、現在のベネズエラ、コロンビア、エクアドル、パナマなどを含む巨大な国家であつた。」(千代勇一「歴史」二村久則編著『コロンビアを知るための 60 章』[明石書店、2011 年] 85 ページ)

¹² 同 84 ページ

¹³ ここでは白人の親をもち、植民地で生まれた者、という意味でこの言葉を使う。

¹⁴ 清水透『ラテンアメリカ 500 年——歴史のトルソー』(岩波現代文庫、2017 年) 179 ページ

ロップ的な文明化に賛同しており、白人以外を野蛮とみなす考えを捨てていたわけではない。「脱植民地化を目指したはずの彼らの最大の関心事は、植民地性の根幹をなしていたヨーロッパ性、白人性を独立国家においても存続させ、植民地的な差別構造を維持することにあつたといえる。つまりは、政治的独立は求めても、300年にわたる植民地性は決して手放すまいとする姿勢がそこに見て取れる」¹⁵のである。ここで私が記述している「歴史」も、基本的に「ヨーロッパ性」を持つ歴史観から整理されたものであり、インディオやメスティソや黒人の声が反映されたものでないことは強調しておかなければならない。

ボリバルはグラン・コロンビアの中央集権的な統治を目指した。「かつて独立運動の途中で王党派の盛り返しを許した苦い経験をふまえ、不安定な連邦制より強固な中央集権国家を求めた」¹⁶のである。しかし連邦制を求める副大統領サンタンデルとの対立などを経て、グラン・コロンビアは分裂する。「グラン・コロンビアは形式的には1831年まで継続したが、1830年にはベネズエラ、エクアドルが相次いで離脱して事実上崩壊していた」¹⁷。そして、現在のコロンビアにあたるヌエバ・グラナダ共和国が1831年に誕生し、自由党と保守党の二大政党もこの時期に生まれることになる。グラン・コロンビアの崩壊後、「弱体化したボリバル派の処遇をめぐって連邦主義者が分裂しはじめた。連邦主義者のうち穏健派が中央集権主義者の取り込みを図ろうとしたのに対し、急進派はこれを政治の舞台から一掃しようとしたためである。この連邦主義者に生じた溝は、1836年の大統領選挙と1840年の内戦を通じて埋めがたいものとなる。やがて急進派は自由党となり（1848年）、穏健派とボリバル派は政治同盟を結んで保守党を形成していった（1849年）」¹⁸。この二大政党を中心に、コロンビアでは1899年からの千日戦争を含め、長い内戦の時代が続くことになる。

この状況をより複雑にしたのが、アメリカ資本による政権への干渉である。保守党政権期の1928年には、ユナイテッド・フルーツ社が所有するサンタマルタ市のバナナ農園でコロンビア軍による労働者の虐殺事件が発生した。ユナイテッド・フルーツ社によるバナナプランテーションについて詳述されたピーター・チャップマンの書籍によれば、「[...]日曜のミサが終わったあと、ストライキを行っている者たちやその家族、そして支援者たちが鉄道駅近くに位置していた中央広場でデモを行うために集結した」とき、「軍隊は広場の角にある低い建物の屋上にマシンガンを設置し、将校が集まった群集に対する警告を発してから5分後に銃撃を開始した」¹⁹のである。ここには、アメリカ（資本）からの恩恵と圧力を同時に受ける保守党政権による、共産主義革命への危惧が見え隠れする。「コロンビア当局がサンタマルタ・ストライキを[虐殺によって]効率よく鎮圧するように努めたのは、この事件が共産主義の思想や活動家によって激化して、国

¹⁵ 同 183-184 ページ

¹⁶ 千代、86 ページ

¹⁷ 同 89 ページ

¹⁸ 同 90-91 ページ

¹⁹ ピーター・チャップマン『バナナのグローバル・ヒストリー——いかにしてユナイテッド・フルーツは世界を席卷したか』（小澤卓也／立川ジェームズ訳、ミネルヴァ書房、2018年）118 ページ

全体の平穏と静けさを乱しかねないと判断したから」²⁰なのである。ストライキが激化した際、アメリカ海軍は小型砲艦を沖合に停泊させていた。「それゆえにコロンビア軍は、アメリカ海軍の介入を許して自国の主権が侵されるという屈辱を味わうことがないようにストライキ参加者に対して行動しなくてはならなかった。ただし批評家たちは、たとえアメリカの軍艦の存在を考慮に入れたとしても、主権国家が自国民を虐殺することに栄光などほとんどないと述べている」²¹とチャップマンは書いている。

1930年からは自由党の時代となり、1946年の大統領選挙には自由党のホルヘ・エリエセル・ガイタンが出馬する。「学生時代に社会主義思想の研究を行ったガイタンは、ボゴタ市長、最高裁判事、国会議員、教育相、労働相といった要職を歴任する一方で、寡頭政治を批判し、農民や労働者の権利保護などの社会改革に力を入れていた。先述のバナナ農園の労働者虐殺事件に関しても、下院議員として政府の責任を追及し、結果的に30年の保守党政権崩壊に重要な役割を果たしている」²²。しかし、自由党が他の候補者を擁立したことなどから、結果として保守党の議員が当選し、自由党に対しての弾圧が強めることになる。ここから始まるのが、「ビオレンシア」[暴力]の時代だ。「1946年のマリアノ・オスピナ・ペレス（保守党）の大統領就任から1958年の軍事委員会政府の終焉までの混乱期に、両政党の政治的暴力によって25～30万人もの命が失われたのである」²³。

最初、ガイタンは非暴力によってそれを乗り越えることを試み、1947年には自由党党首に就任。民衆の支持も厚かった。しかし1948年、ガイタンが暗殺されるやいなや、ボゴタで大規模な暴動が発生する。「その後、この暴動は地方へと飛び火し、全国各地で自由党員と保守党員の間で殺し合いがはじまった。拷問、リンチ、虐殺、焼き討ちなど暴力のかぎりか尽くされるなかで、政府側の保守党勢力に追われた自由党支持者のなかには、山岳地帯などに逃げ込んでゲリラとなる者も少なくなかった。特にアンデス山脈の東に位置するリャノ平原はこうした自由党系ゲリラの拠点となっていった」²⁴。ビオレンシアの時代はこの後10年続き、「1958年の二大政党の和解によって誕生した国民戦線の成立をもって終わったとされる。しかしながら、ラ・ビオレンシアによって形成された暴力の構造は、今日にいたるまで存続しているといえるだろう。60年代には数々の左派ゲリラ組織が生まれ、その左派ゲリラに対抗して非合法の極右民兵組織も出現し、これまでに多くの市民が暴力の被害者となってきた。さらには軍や警察による超法規殺人や人権侵害の問題も明らかになっている」²⁵。この、60年代からの暴力がいわゆるコロンビア内戦であり、左派ゲリラ組織の代表がコロンビア革命軍（FARC）である。そして、それと切ってもきれない関係だったのがコカインの存在であった。

コロンビアにおける麻薬の主な供給先はアメリカである。清水によれば、「1980年代にはい

²⁰ 同 119 ページ

²¹ 同 120 ページ

²² 千代、96 ページ

²³ 同 95 ページ

²⁴ 同 98 ページ

²⁵ 同 99 ページ

り米国市場での麻薬消費がマリファナからコカインへ移行すると、麻薬カルテルの活動が活発化」した。「1964年に武装蜂起したコロンビア革命軍（FARC）は、この間ゲリラ闘争を継続」するが、「80年代から資金源として麻薬取引に手をだし」、従来の麻薬カルテルが壊滅すると、「FARC自らがコカインの密造・密売に乗り出し、政治闘争と麻薬がからみあったナルコ・ゲリラへと変貌」した。「しかし2016年11月、サントス大統領政府とFARCとの間で和平協定が締結され、約半世紀にわたる内戦は、死者・行方不明者22万人から30万人、国内難民150万人という記録を残し、ようやく終結」²⁶したのである。

そのような激動の時代、後に紹介する表現を使うなら「非常事態」のさなかにあるコロンビアに、タウシグはフィールドワークを目的として飛び込んだことになる。2015年刊行の『コーン・ウルフ』（*The Corn Wolf*）に収録された「ドン・ミゲル」（Don Miguel）の冒頭で、タウシグはこう述べている。

私の名前はマイケル[Michael]だが、私がコロンビアに辿り着いたとき、人々は私をミゲル[Miguel]と呼んだ。私は1969年の11月、革命に参加するために到着した。²⁷

だが、タウシグは実際には革命に参加することなく、人類学者となる道を選んだ。文章によって「非常事態」を表象し、混乱する世界の調停を試みる道を選んだのである。そして、その際に彼が考案した概念が「ナーヴァス・システム」であった。

2 ナーヴァス・システム

ナーヴァス・システムという言葉には様々な意味が込められている。このことについて、アメリカの文化史家、ジョージ・ルソーは以下のように説明している。

この書物[『ナーヴァス・システム』]において、主題はタイトルが持つダブル・ミーニングによって伝えられている。すなわち、一方では人間の神経系を支配的な——決定論的でさえある——力として描き、他方では、まったく体系的^{システムティック}ではないが激しく神経質で、だからこそ崩壊の瀬戸際にあるシステムとして描く。²⁸

タウシグが頻繁に用いる「神経質に不安定なナーヴァス・システム[nervously nervous nervous system]」という言葉は後者のことを示している。では、なぜタウシグは支配のシステムと不安

²⁶ 清水、301 ページ なお、原文にあったサントスの略歴は省略した。

²⁷ *The Corn Wolf*. p. 180. なお、以降の脚注ではタウシグの単著からの引用に関してのみ、著作名とページを併記することで該当する箇所を示す。これは単純に、参照の際の利便性を追求した措置である。

²⁸ Rousseau, Georg S. *Nervous Acts: Essays on Literature, Culture and Sensibility*. Palgrave Macmillan, 2004, p. 67.

定なシステムといういっけん相反する意味を、ひとつの言葉に込めたのだろうか。

1992年に刊行された『ナーヴァス・システム』(*The Nervous System*)の第1章「なぜナーヴァス・システムか?」(Why the Nervous System?)において、タウシグはドイツの思想家、ヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)の歴史哲学における「非常事態」の概念と結びつけてナーヴァス・システムを説明している。まず、ナーヴァス・システムという言葉の支配のシステムとしての側面について、タウシグはエドモンド・バークの論を援用しながら以下のように述べる。

しかしながら、明確なことがひとつある。恐怖について問題となるのは、それがいかにして国家を横切り、口から口へ、あるいはページからページへ、形象から身体へと通過するかということなのだ²⁹。[バークの論には]十分に真実があった。そしてそこには、まさにその連鎖に自分自身を巻き込ませる私があった。ここで、それが再び、目に見える場所へと方向を変えやってきた。ナーヴァス・システムだ! それは今、つながっている。ひとつのシステム、それでいい。管制高地にある配電盤。その中央集権的な力の中にあるデリケートな部分。しかしそこには体系はなかった。ただ、ナーヴァス・システムがあった。危険から程遠く、恐怖によって凝結させられた秩序の幻想。詩人ブレヒトが1930年代に書いたことのアップデートされたヴァージョンだ。秩序化された無秩序、例外と原則にとりつかれたもの。³⁰

ここでタウシグが引き合いに出しているブレヒトの文章とは、1930年に書き始められ、1937年秋にモスクワで発表された³¹教育劇「例外と原則」(*Die Ausnahme und die Regel*)のことであると思われる。「秩序化された無秩序」という表現は、演技者たちが述べることになっている最初の口上の部分に登場する。

絶えず起こっていることを当然だと思ってしまうことだ!
なぜならいまのような血塗れの混乱の時代
秩序化された無秩序の、計画された放埒の時代に
人間性が非人間化されたこの時代に
当然と考えられるものなどあってはならない。それが
不変なものなど認めないことに繋がるのだ。³²

²⁹ この問題意識は、タウシグの前作である *Shamanism, Colonialism, and the Wild Man: A Study in Terror and Healing* でもすでにみられるものである (p.127 など参照)

³⁰ *The Nervous System*. p. 2.

³¹ 岩淵達治「第8巻作品解題」ベルトルト・ブレヒト『ブレヒト戯曲全集』8巻(岩淵達治訳、未来社、1999年)409ページ

³² ベルトルト・ブレヒト「例外と原則」『ブレヒト戯曲全集』8巻(岩淵達治訳、未来社、1999年)273-274ページ

この口上からも分かる通り、「例外と原則」という戯曲は、当然とされていることに疑いの目を向けるよう、観る者に強く促す内容となっている。

簡単に内容を説明しておこう。物語の前半は、商人とその商人に虐げられる^{クワリ}苦力の旅の様子が描かれる。あるとき、苦力は商人に水筒を手渡そうとする。しかし商人はそれを、自分を撲殺するための石と勘違いし、苦力を射殺する。後半では、苦力の妻が商人を相手取って行う裁判の様子が描かれる。証言者が登場し、苦力が石ではなく水筒を持っていたことが立証される。しかし裁判官は、商人が苦力を虐げていることからして、苦力が商人を襲おうとしていると商人が考えるのは当然なので、商人の行為は正当防衛である、という理屈で苦力の妻の訴えを棄却するのである。そして劇は、以下の口上で終わる。

尋常でないことを、奇妙なことと思ってくれ！

当たり前でないことを、説明がつかぬと思ってくれ！

普通に行われていることに、驚嘆してもらいたいのだ。

原則になっていることが、じつは悪用されてた[ママ]ものだと見抜け

この悪用を見抜いた時点で

対策を講じろ！³³

ここでブレヒトは、裁判という「原則」を重んじる秩序を、「秩序化された無秩序」として描いている。ナーヴァス・システムについてタウシグが書いた「秩序の幻想」という言葉も、このことを指している。それはすなわち、原則化された例外ともいえる。裁判官は商人に与するため、苦力に対する「例外」的判断を「原則」に転置するのだ。ブレヒトは、そうした反転に注目するよう戯曲で促しているのである。だが、タウシグはこうしたブレヒトの考えを「アップデート」する必要があると述べていた。たとえばこの戯曲における裁判のように、権力者から「～しろ」と直接命令されるようなシステムならば、その問題点を指摘するのはある意味たやすい。だが、タウシグの問題視する支配のナーヴァス・システムは、「危険から程遠」いように見えてしまい、しかしながら確かに漂うおそれによって規定される「秩序の幻想」なのである。タウシグは、さらにベンヤミンの文章を援用してナーヴァス・システムの輪郭を描こうとする。

タウシグは 1980 年代のプトゥマヨ川流域の状況について説明したうえで、以下のように述べる。

このこと[プトゥマヨ川流域の状況]に完全に関連するのは、ベンヤミンによる、非常事態 [state of siege] としての歴史の概念だった。そしてもちろん、非常事態を宣言し、それとともにリヴァイアサンの特殊効果を確かなものにするのは国家である。その効果とは、国家というアイデアの物神的な力であり、そこでは権力の恣意性が支配の正当化を後押しし、理性と暴力がふたりのささやかなデュエットを行う。「抑圧された者の伝統は」と彼は 1930 年

³³ 同 303-304 ページ

代の終わりに書いている。「その中で私たちが暮らす『非常事態』 [state of emergency] が例外の状態ではなく原則であることを教えてくれる」。これは、ある現実——コロンビアと他のラテンアメリカ諸国に著しく共通しており、そして1991年現在、アメリカ合衆国の一部の地域でもかなり鮮明な現実——を指し示す試みというだけではなかった。それは歴史を見て、反応する際の、ラディカルかつ従来と異なる方法を引き起こすことも意図していたのである。なぜなら、非常事態において秩序は凍るのだが、無秩序は水面下で沸騰するのだから。ゆっくりと圧縮され今にも弾けようとしている巨大なバネのように、限りない緊張が奇妙な安寧の中に横たわる。³⁴

タウシグが引用しているのは、ベンヤミンの遺稿とされている「歴史の概念について」の第8テーゼである。該当する部分をドイツ語から訳出しておく。

抑圧された人々の伝統は私たちに以下のことについて教訓を与える。その中に私たちが住んでいる「非常事態」³⁵は、原則だという教訓である。私たちはそれに対応する歴史の概念を手に入れなければならない。その場合、私たちの使命は、目前にある本当の非常事態を引き寄せる、ということになる。そして、それを通して私たちのファシズムに対する闘争の立ち位置はより良いものとなるのだ。³⁶

原文にはタウシグが引用する英訳版の“not the exception but”に相当する部分がなく、「非常事態」がそのまま、英語の“the rule”に相当する „die Regel“ と等しいものであるとされている。英訳で「例外の状態ではなく」という表現が付け加えられたのは、「非常事態」にあたるドイツ語の „der Ausnahmestand“ が、「例外」を意味する „die Ausnahme“ と「状態」を意味する „der Zustand“ を組み合わせた語であることによると思われる。つまりここでは「例外的な状態」としての「非常事態」と、「原則」が対になって使われているのである。

これをブレヒトの戯曲にあてはめて考えてみよう。苦力は、まさにここで言及される「抑圧された人々」だ。そして、裁判によって苦力が有罪となるような「秩序化された無秩序」「原則化された例外」という反転は、「原則化された非常事態」と言い換えることができる（「その中に私たちが住んでいる『非常事態』は、原則である」）。これは、タウシグの言葉では「秩序の幻想」に相当する。すなわち抑圧された人々は——さきほどタウシグがナーヴァス・システムを説明す

³⁴ *The Nervous System*. pp. 9-10.

³⁵ ベンヤミンが「非常事態」と書くとき、その言葉はカール・シュミットの影響を多く受けている。本来ならシュミットの論もふまえてベンヤミンの「非常事態」の概念を詳しく論じるべきところだが、本論文では、タウシグが「なぜナーヴァス・システムか？」で展開した議論を追うにとどめる。なお、ベンヤミンとシュミットの非常事態／例外状態の概念の比較は、長濱一真「非常事態／例外状態をめぐる——ベンヤミンとシュミット」『人間社会学研究論集』6号（大阪府立大学大学院人間社会学研究科、2011年）3-26 ページが詳しい。

³⁶ Benjamin, Walter: „Über den Begriff der Geschichte“, in: *Gesammelte Schriften, Band I-2*. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1974, S. 697.

るために用いていた表現を使えば——「恐怖によって凝結させられた秩序の幻想」という「非常事態」の中に住んでいるのである。タウシグが「非常事態において秩序は凍る」と述べていたのはこの意味においてである。

それと同時にタウシグは「無秩序は水面下で沸騰する」と書いていた。ここで言及される無秩序は、「秩序化された無秩序」ではなく、秩序化される前の——こう言ってよければ本当の——無秩序である。それは、氷の下で沸騰する湯のように、あるいは圧縮されたバネのように、秩序の幻想によって作りだされた安寧を今にも破壊し、飲み込もうとしている。だがこの無秩序こそが、恐怖によって秩序化されることで「秩序の幻想」をつくりだしたもののなのである。無秩序と「秩序の幻想」の間には、恐怖という境界が薄い膜のようにあるだけだ。そしてその境界は、「秩序の幻想」とそれを取り囲む無秩序という緊張関係そのものによって成り立っているのである。タウシグがここで、「非常事態」という言葉について、ベンヤミンの英訳で用いられていた“state of emergency”ではなく“state of siege”[包囲された状態=非常事態]という言葉を用いたのは、こうした、絶えず無秩序に取り囲まれたかりそめの秩序をこそ表現したかったからと言えるだろう。そして、そのかりそめの秩序と、それによるシステムならざる支配のシステムこそ、「ナーヴァス・システム」なのである。

このように、「支配のナーヴァス・システム」は非常に複雑な様相を呈している。これを批評するには、どのような方法がありうるのだろうか。あるいは、「対策を講じろ！」というブレヒトの声に答えて、タウシグは「非常事態」にどう対処するのだろうか。従来の学術的な文章では、無秩序がつくりだす秩序の幻想という支配のナーヴァス・システムを鮮明に描き出すことはできない。なぜなら、従来の学術的文章が志向するのはまさに秩序そのものだからである。タウシグは述べる。

そしてこの意味で、社会批評において支配的な、西洋のドラマティックな伝統ほど見当違いのことはない。それはナーヴァス・システムに日々の修正を加えながら行われる、暗闇から光、無秩序から秩序への知的奮闘の冒険が意味をなすような伝統のことだ。³⁷

すなわちタウシグは、西洋的かつ啓蒙的な学術の体裁そのものを疑問視しようとしているのである。「表象に関して私たちが用いる、まさにその形式と意味が非常事態の中にあるのだ。それ以外にあるだろうか？」³⁸という一文からもそのことは明白である。後ほど述べることになるが、タウシグの場合、学術的体裁への疑問は文化人類学の「科学的」態度に対する疑問となって現れることが多い。それはフィールドの無秩序を恣意的に秩序に収斂させていくという点で、人類学的記述においてその「非常事態」が際立っているからだと言えるだろう。

よって、タウシグが模索するのは学術的な秩序のシステムに頼らない記述だ。それは、再びジョージ・ルソーの言葉を借りるなら、「まったく体系的システムティックではないが激しく神経質で、だから

³⁷ *The Nervous System*. p. 9.

³⁸ *Ibid.* p. 10.

こそ崩壊の瀬戸際にある」記述であろう。つまり、ナーヴァス・システム的な記述である。ナーヴァス・システムに対処するためには、別のナーヴァス・システムを用いる必要があるのだ。それがもうひとつのナーヴァス・システム、「神経質に不安定なナーヴァス・システム」である。それはある意味書き方そのものなので、ここでその定義や特徴をまとめるのは非常に難しい。タウシグは言う。

そしてそれは、^{システムティック}意図的にナーヴァスなだけでなく、ナーヴァス・システムそのものであるような書き方のモードを必要とする。もちろん、それはナーヴァス・システムの際にあるもの、最後から二番目のバージョン、永久に終わりの手前にあるものであらざるをえない。³⁹

つまり、タウシグにとってさえ、それは完成などない模索なのである。

こう考えると、『ナーヴァス・システム』発表後のタウシグの文章は、ナーヴァス・システムをいかに表象するかということを通題としたものだともいえるかもしれない。だがその中で、「ナーヴァス・システム」は様々な形で言い換えられ、変奏され、超克を試みられる。それは「永久に終わりの手前にあるもの」という神経質に不安定なナーヴァス・システムの性質からすれば当然のことだといえるだろう。

ところで、この「ナーヴァス・システム」という概念の源泉はどこなのだろうか。本章では最後に、フランスの思想家、ジル・ドゥルーズ(1925-1995)とフェリックス・ガタリ(1930-1992)の「リゾーム」の概念との比較で、ナーヴァス・システムについて補足しておきたい。

タウシグは2018年の著作『パルマ・アフリカーナ』(*Palma Africana*)の中で、ブラジルの文化人類学者エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ(1951-)の鍵概念「食人の形而上学」を引き合いに出し、「ナーヴァス・システム」について以下のように述べる。

食人の形而上学では、あらゆる種類の変化する形式、つながり、可能性とともに、世界は驚くほどの流動性の中にある。それは、ある人のもともとの視点をフィードバックし、そのことで変化させるといふいとなみを際限なく繰り返す、解釈学的な構成要素を大変多く含んでいる。このことを、私はナーヴァス・システム、あるいは神経質に不安定なナーヴァス・システムと呼ぶ。しかし今、私たちは「アップグレード」を必要としている。食人の形而上学のアップグレードだ。⁴⁰

ヴィヴェイロス・デ・カストロの考えはドゥルーズとガタリを基盤にしている⁴¹。タウシ

³⁹ Ibid.

⁴⁰ *Palma Africana*, p. 68.

⁴¹ エドゥアルド・ヴィヴェイロス・デ・カストロ『食人の形而上学——ポスト構造主義の人類学への道』(檜垣立哉・山崎吾郎訳、洛北出版、2015年)

グが「食人の形而上学」について語るときの「流動性」や際限のない変化という表現も、ドゥルーズとガタリの「生成変化」の概念に通じるものである。そして注目すべきことだが、タウシグはそれを自らの「神経質に不安定なナーヴァス・システム」と結びつけるのである。実はタウシグは『パルマ・アフリカーナ』の中で、「ナーヴァス・システム」の考えとドゥルーズとガタリの思想を直接結びつけている。それが以下の部分である。

D&G[ドゥルーズとガタリ]にとって、雀蜂と蘭という演出^{ミザンセーズ}は、人がそれに注目するときに変化し続ける神経質に不安定なナーヴァス・システムの中で物事を結びつける方法を考え直すことを要請するものである。⁴²

雀蜂と蘭というのは、ドゥルーズとガタリが好んで用いるたとえ話である。『千のプラトー』の序章、「リゾーム」において、ドゥルーズとガタリは書く。

蘭は雀蜂の複写という形象を形作ることによって脱領土化する。しかし、雀蜂はその形象の上に再領土化する。とはいえ、雀蜂は蘭の生殖器官の一部になっており、脱領土化する。しかし、雀蜂は蘭の花粉を運ぶことによって蘭を再領土化する。雀蜂と蘭は、異種の構成部分として、リゾームをなしている。⁴³

ここでは、脱領土化と再領土化が同時に起こり、絶えず変化し続けてリゾームをなすというドゥルーズとガタリの思想が説明されている。このたとえを引き合いに出し、「ナーヴァス・システムの中で物事を結びつける方法」とタウシグが言うとき、「ナーヴァス・システム」が「リゾーム」に非常に近い概念だということが分かる。

そのことをふまえ、本論文では、タウシグが「リゾーム」の概念から「ナーヴァス・システム」を導き出したという可能性を提示したい。なぜなら、まさに『千のプラトー』に「ナーヴァス・システム」という言葉が登場するからである。それが、同じく「リゾーム」の以下の部分だ。

思考は樹木状ではないし、脳は根付いた、あるいは分岐したものではない。誤って「樹状突起」と呼ばれるものは決して、連続した組織の中にあるニューロンのつながりを保証するものではない。細胞間の不連続性、軸索の役割、シナプスの働き、シナプスにある微小の割れ目の存在、それらの割れ目を越えてそれぞれのメッセージが作る跳躍といったものが、脳をある多様なものにするのだ。そこで脳は、その存立平面あるいは神経膠、すなわち、まるごと不確かで確率的なシステム（「不確かな^{ナーヴァス}神経システム」）に浸されている。多くの人の頭の中では一本の木が育っているが、脳それ自体は木というよりもはるかに草で

⁴² *Palma Africana*. p. 76.

⁴³ Deleuze, Gilles and Guattari, Félix. *A Thousand Plateaus: Capitalism and Schizophrenia*, translated and foreword by Brian Massumi. U of Minnesota P, 1987, p. 10.

ある。⁴⁴

ここでは、脳が枝分かれしたものではなくリゾーム的なものであることが説明されている。タウシグがこれを読み、ナーヴァス・システムという語に感銘を受けたとしても不思議はないだろう。タウシグがドゥルーズとガタリについて直接的に論じることは少ないが、彼が彼らの思想に親しんできたのは明白である。たとえば2003年に発表された『法なき土地の法——コロンビアの「掃除」についての日記』(*Law in a Lawless Land: Diary of a "Limpieza" in Colombia*) のとある場面はそのことを示唆している。そこでタウシグは、彼がコロンビアで出会った人権についての仕事を行う法律家との面談を回想する。その法律家は、タウシグに地図を見せつつ、彼の言う麻薬輸送の「回廊」について説明した。彼が話す間も、その地図には複雑な線が書き込まれていた。そのことについて、タウシグはこう述べる。

私はそれらの「回廊」について疑わしいと思わざるをえなかった。麻薬輸送の状況は重量と体積によって刻一刻と変わるし、コロンビアは幅広く変化に富む「領土」をもつ大きな国だ。「回廊」は潜在的にどこにでもある。そういった用語で語ることは、私には、現実を描写するというよりはむしろ、自己満足を支えることのように思える。自分自身を器官と領土化に付属させ、大物が戦略的思考に通ずるものとしておこなっていると想像されるような行為を真似すること。⁴⁵

ここでタウシグは、「地図」というドゥルーズとガタリが好んで用いた言葉について考えるために、「領土」を引用符で括った上で、「器官」「領土化」という言葉を用いている。ドゥルーズとガタリにとって生成変化とは「領土化」された「領土」を「脱領土化」し、それと同時に「再領土化」された「領土」をまた「脱領土化」するという繰り返しのことであった。そしてそこでは「器官」が特定の器官として峻別されない「器官なき身体」が現れる。つまりここでタウシグは、ドゥルーズとガタリの思想を暗黙の前提として、法律家の固定的で権威主義的な態度を「器官」と「領土化」に属したものであると述べているのである。さらにタウシグは、自身にも思い当たる節があるとした上で以下のように述べる。

しかし、もしそれがシステムではなく、その中で、それが知覚された瞬間に秩序が無秩序になるような「ナーヴァス・システム」だとしたら？⁴⁶

すなわち、ここでもドゥルーズとガタリの思想と「ナーヴァス・システム」は接続されているのである。

⁴⁴ Ibid. p. 15.

⁴⁵ *Law in a Lawless Land*. p. 16–17.

⁴⁶ Ibid. p. 17–18.

3 民族誌とフィクション

ここまで、文化人類学者としてのタウシグの経歴とナーヴァス・システムについて見てきた。ここからは、タウシグが自らの著作をいかにナーヴァス・システム的なものとして出現させようとしているか、という点に注目したい。

タウシグが最初に著した著作は1980年に発行された『南アメリカにおける悪魔と商品の物神崇拜』(*The Devil and Commodity Fetishism in South America*)である。本書は三部構成になっている。第1部は理論的な説明であり、第2部はそれをコロンビアのカウカ地方のプランテーションに、第3部はそれをボリビアのスズ鉱山に適用する。全編を通して経済的な分析が多く、資本主義的な搾取への鋭い批判が展開される。その際、キリスト教の流入による鉱山内での悪魔崇拝の誕生などの人類学的话题を直接、経済と結びつけるところにタウシグの論のユニークさがある。だが、1987年に発表された第2作『シャーマニズム、植民地主義、野生の人——恐怖と癒しの研究』(*Shamanism, Colonialism, and the Wild Man: A Study in Terror and Healing*)と共通する特徴として金子遊が指摘するように、「これら初期を代表する労作が、従来の民族誌のスタイルを逸脱するものにはならなかったこと」⁴⁷も事実であろう。

この点について、タウシグは2010年に発行された『南アメリカにおける悪魔と商品の物神崇拜』30周年記念版の序文で語っている⁴⁸。タウシグは自身の第1作について、「この悪魔についての本は、今見るとそのストーリーテリングのモードの点で不十分なものであるように思える」と語っている。続いてタウシグはこう述べる。

そのかわり、それは明確で乾いた分析的散文体で書かれており、そのことはこの本自体を、特権性を帯びた博識な声、すなわち学問的記述に適応するために早々に学ぶことになるトリックのひとつによって、その主題から遠ざけている。もちろん、そのことから逸脱することは、読者を失うという憂慮すべき危険を冒すことである。なぜなら、彼らもまた真実の言語としてのそのトリックに慣れているからだ。⁴⁹

その上でタウシグは、彼が初めてコロンビアに行ったところの思想潮流について語る。1960年代当時、タウシグや彼と同世代の学生たちは「客観的な状態」に疑問をいだき始め、マルクス主義的な意味での「意識」に注目していた。その流れを汲み、1970年代になってカルチュラル・ス

⁴⁷ 金子遊「マイケル・タウシグの人類学と思想」マイケル・タウシグ『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』(金子遊／井上里／水野友美子訳、水声社、2016年)381ページ

⁴⁸ この部分の理解には、第5章で詳しく紹介することになる Haas, Gerrit. *Fictocritical Strategies, Subverting Textual Practices of Meaning, Other, and Self-Formation*. transcript Verlag, 2017. *Google Play*, <https://play.google.com/store/books/details?id=vUAADgAAQBAJ>. の116-117ページを特に参照したことを記しておく。

⁴⁹ *The Devil and Commodity Fetishism in South America*. p. xi.

タディーズの考えが生まれる。その前提に立ち、タウシグは以下のように述べる。

物神崇拝の概念は私が「意識」に向かって手探りしながら進むのを助けてくれたが、私は次の段階へ踏み出してはいなかった。それは、考えが感情を伴ってどのように働き、またそれらが言語の中に置かれることによって、どのように世界を描くかということの、「表現」の形式と手触りを熟考することだった。私の意見では今日において、文学だけが、すなわちフィクション及び、フィクションと重なりあう記録の形式、つまり、私がどこかでフィクトクリティシズムと呼んだものだけが、それを行うことができる。⁵⁰

フィクトクリティシズムという考えについては第5章で詳しく確認することになる。ひとまずここで注目すべきなのは、タウシグが、経験を記述することの繊細さに耐えうるのは「フィクション及び、フィクションと重なりあう記録の形式」のみであると強調している点であろう。フィクション的な要素こそが、彼の初期の民族誌に足りないものだったというのである。彼がそう考えるようになった経緯について、タウシグは続く部分で説明している。

悪魔についての本の7年後に出版された私のシャーマニズムについての本（『シャーマニズム、植民地主義、野生の人——恐怖と癒しの研究』）の中で、私は1900年ごろのアマゾン川上流プトゥマヨ地域におけるゴムブームの中で起こった、残虐な暴力をよりよく理解するために奮闘した。そして、その理解によって私はますます、恐怖を語ることや書くことについて焦点を当てるようになった。それは、いかに暴力についての記述のほとんどが暴力をより悪いものにするかということに、ますます敏感になってのことだった。⁵¹

暴力についての記述は、暴力の混沌を秩序化してしまう可能性を常に内包している。それはかりそめの秩序を強化し、支配のシステムに与してしまう可能性だ。「ナーヴァス・システム」が、〈絶えず無秩序に取り囲まれたかりそめの秩序〉と〈それによるシステムならざる支配のシステム〉であることは先ほど確認した。すなわちタウシグにとって、暴力についての記述は簡単に支配のナーヴァス・システムと結びついてしまうものなのである。先ほどの部分に続いて、タウシグは以下のように述べる。

そのときの私の理論は——今も同じように——恐怖と極限状態についての物語が、ストーリーテラーたちの鎖に沿って通過しながら、現実を（良い点としては、不確かさを通して[確かなものとして]）形成する[秩序化する]大きな力を持っているということだった。そうであるならば、その鎖を打ち壊したいと願うストーリーテラーの課題は、私が思うに、その鎖が決して止まりえないこと、遅かれ早かれ別の物語が自らのそれを払いのけてしまうことを十

⁵⁰ Ibid. p. xii.

⁵¹ Ibid.

全に知りながらも、積極的に行動を取り、新しい物語を見つけ出すことだ。必然的にフィクションとむすびついた暴力と記憶の世界とは、そういうものなのだ。⁵²

ここでタウシグが述べる「ストーリーテラーの課題」は、まさに「永久に終わりの手前にあるもの」としての「神経質で不安定なナーヴァス・システム」に賭けることだといえるだろう。タウシグは民族誌という「物語」の語り手として、その課題に取り組んでいるのだといえる。そしてタウシグにとってそうした営みは、「必然的にフィクションとむすびついた」ものなのである。

文化人類学において、民族誌とフィクションを重ねるような考えはタウシグ独自のものではなく、1980年代に活発になった民族誌に対する批判の中から生じたものである。1986年にジェイムズ・クリフォードとジョージ・マーカスによって発行された論集『文化を書く』(Writing Culture)では、民族誌的記述に対する激しい問題提起が行われている。1980年代の文化人類学において、この書物の影響は絶大⁵³であり、80年に初の著作を刊行したタウシグも、その影響を強く受けていると思われる。クリフォードは序文の「部分的な真実」(Partial Truths)において、「書くことは、もはや周縁にある、あるいは掩蔽された次元としてではなく、人類学者がフィールドと、フィールドから帰った後の両方で行うことにとって中心的なものとして現れてきている」とし、このことが軽視されてきた事実は、「表象が透明なものであり、経験を直接に反映していると主張するイデオロギーのしつこさを反映している」と批判する。その上で「ここに集められた論文は、このイデオロギーが崩れてきていることを強く主張するものだ」と述べるのである⁵⁴。その上で、民族誌がフィクションであることが指摘される。その「フィクション」とは「単に真実の反対にある何事かの虚偽性を含意する」言葉ではなく「文化的・歴史的な真実の部分性を示すものであり、それらの真実がいかに系統的[秩序付けられたもの]であり排他的であるかを示す」⁵⁵言葉であるとされる。

また、クリフォードは1988年に原著が発表された『文化の窮状』所収の「民族誌における権力と対話」の中でも、「どの程度はつきり顕れているかはさまざまであるが、民族誌とは異文化のリアリティについての虚構であると同時に、自らの生産様式に関する虚構でもあるのである」⁵⁶と語っている。すなわち、ここで言われる「自らの生産様式に関する虚構」＝フィクションとは、異文化を認識し、さらにそれをテキストに定着させるという、表象の過程で起こる問題を相手取った言葉であるといえる。自らの経験を「部分的」に取捨選択し、「民族誌」という様

⁵² *The Devil and Commodity Fetishism in South America*. p. xii-xiii

⁵³ たとえば管啓次郎は1988年の段階で『文化を記述する』(Writing Culture)に見られるような民族学を危機にさらそうとする動きは、もはやとどめることはできないでしょう」と書いている。(管啓次郎「対話によるエスノグラフィについて」『コロンブスの犬』[弘文堂、1989年] 249ページ)

⁵⁴ Clifford, James. "Introduction: Partial Truths." *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, edited by James Clifford and George E. Marcus. U of California P, 1986, p. 2.

⁵⁵ *Ibid.* p. 6.

⁵⁶ ジェイムズ・クリフォード「民族誌における権力と対話——マルセル・グリオールのイニシエーション」『文化の窮状——二十世紀の民族誌、文学、芸術』(太田好信/慶田勝彦/清水展/浜本満/古谷嘉章/星桎守之訳、人文書院、2003年) 109ページ

式に流し込んでいる時点で、民族誌はそのフィクション性から逃れられないことをクリフォードは指摘したのである。

クリフォードが指摘した文脈では、民族誌のフィクション性とはその恣意的な秩序化の傾向のことであった。すなわち民族誌におけるフィクション性とは、そもそも「ナーヴァス・システム」的なものなのである。だがタウシグはそうした秩序化を、フィクション性によって乗り越えようとしているように思える。先ほどの部分に続けて、タウシグはこう述べている。

しかしながら、こうした問題の状況を認識することは、肅然たる悲観主義を導くだけなのではなく、可能性の薄片をも導くものだ。その薄片というのは、おそらく、ただそうかもしれないというだけだが、自らの払いのけている[作りだした]物語と、次にそれを払いのけようとする物語との間にあるその間隔の緊張が、その中で暴力が癒しへと変形する力場をつくりだすことができるということである。これは私が「終わりの手前性[penultimaticity]」と呼ぶものであり、永久に終わりの手前にいる者として書くことである。⁵⁷

この「終わりの手前性」という言葉は、まさに「永久に終わりの手前にあるもの」であるところの「神経質に不安定なナーヴァス・システム」そのものである。タウシグは、自らの記述がいずれ別の物語に置き換えられてしまうことを知りながらも、無秩序の秩序化から逃れる方法としてのフィクション性に賭ける。それは、ストーリーテラーたちの鎖の末端にいるようにひたすら走り続けることであり、ドゥルーズとガタリの用語で言い表すなら、鎖を常に脱領土化しながら、逃走線を引き続けることなのだとはいえるだろう。

では、タウシグの著作においてフィクション性はどのように表出するのだろうか。たとえば、ベネズエラのマリア・リオンサ信仰について書かれた1997年刊行の『ザ・マジック・オブ・ザ・ステイト』(*The Magic of the State*)は、全編がフィクションの形式を採っている。後のインタビューで、タウシグはこの本について以下のように語っている。

『ザ・マジック・アンド・ザ・ステイト』[ママ]における細かい部分の全ては、確かにその山で見つかるであろうものです。その点では、私によって作られたものは何もありません。しかし、町の外からやってきたこれらの登場人物たちを呼び出すことで、私はドキュメンタリーに退屈する読者を安心させることができます。私はメタレベルの思考、あるいは思考の第二のレイヤーを提示します。すなわち、記述されている内容と、書き手の手仕事の一部、つまりは一連のフェイント、試行、ブラフ、言葉と事物たちのごちゃまぜとして、書かれたページの上で起こっていることの並行。手短かに言えば、永久に、微妙に暫定的なドキュメンタリーの本質。それは私の手にかからなければ通常、無批判に、真実に結びついたものとして提示されます。⁵⁸

⁵⁷ *The Devil and Commodity Fetishism in South America*. p. xiii.

⁵⁸ David Levi Strauss and Michael Taussig, "The Magic of the state: An Interview with Michael

すなわちタウシグは、民族誌的な文章が「無批判に、真実に結びついたものとして提示」されることを避けるため、あえて最初から虚構の形式を採用するのである。それはやはり、クリフォードによる「真実がいかに^{システムティック}系統的であり排他的であるか」という言葉と関連するものと言ってよいだろう。だがタウシグは、ただ真実性を批判するためにフィクションを用いているわけではない。むしろ彼は、フィクション性の持つ力を批評に利用しようと試みている。それは、「永久に、微妙に暫定的なドキュメンタリーの本質」を、秩序に収斂させることなく、「神経質に不安定なナーヴァス・システム」によって表象する試み、と言い換えることもできるだろう。

『ザ・マジック・オブ・ザ・ステイト』の他に、フィクション性を用いた文章の典型的な例だと思われるのは、『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』に収められた「アメリカを構築すること」である。この文章は、コロンビアのプエルト・テハダに住んでいた詩人、トマス・サパタと、彼の叙事詩における歴史の表象についてのものである。とはいえ、その記述スタイルは詩人の紹介と解説というような単純なものからはかけ離れている。まず、この文章は学会発表の文章化という側面を持っている。その学会はコロンビア人類学協会の主催で1992年に、コロンブスのアメリカ大陸発見500年を記念して行われたものであり、タウシグの発表には200人ほどの聴衆がいたとされている。その学会の詳しい情報については現在では手に入れるのが困難であったが、『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』版（他のヴァージョンについては後述）の最初のページの下部⁵⁹には、その学会発表のスペイン語版が収められた書物の名が記され、その書物は実際に存在する⁶⁰ため、タウシグがその学会に実際に参加したことは、ほぼ間違いないとみてよいだろう。

そこまで疑い深くなってしまうのには理由がある。この文章＝学会発表におけるトマス・サパタは、架空の資料館に残された記録に登場する詩人なのである。タウシグは文章の中で、サパタについて「とても年老いて、とても黒い盲目の男」であり、「イングランドとオーストラリアからやってきて旅をしている身元不詳の若い白人の男の持ち物の中から発見された日記、文章、写真、録音テープに現れる」と述べる。加えて、「この男の名前は、記録の中で単にミゲルとして登場する」とされる。そして、「これらの素材は4年前、プラハにあるラテンアメリカ研究のための世に知られていない資料館で発見され、ありがたいことに、その資料館の館長が利用できるように整理してきたものである。しかしながら、それらの資料は、経済的な、そして管理上の困難によって、ここに持つてくることはできなかつた」⁶¹とされる。そして発表者であるタウシグは、それらの資料を資料館の館長と閲覧した際の情景を交えながら、文中で主に「記録者」と呼ばれるミゲルに寄り添いつつ、トマス・サパタのおかれた状況や彼の詩について解説し、考察を

Taussig.” *Cabinet*, Immaterial Incorporated, <http://www.cabinetmagazine.org/issues/18/strauss.php>.

⁵⁹ *Walter Benjamin's Grave*, p. 33.

⁶⁰ “Cultura y salud en la construcción de las Americas: primer simposio internacional de cultura y salud: la cultura de la salud en la construcción de las Américas.” *SearchWorks catalog*, Stanford Libraries,

<https://searchworks.stanford.edu/view/2974930>.

⁶¹ *Walter Benjamin's Grave*, p. 35.

深めてゆく。しかしながら文章の終盤、「謎めいた記録者のへまの数々と、私自身から必要な距離をとるために私が構築してきた架空のプラハ資料館の架空の館長の、適切な助言に感謝を」⁶²という文章によって、読者はある種、足元をすくわれたような心地を味わうことになるのである。

見てきたようにこの文章の構造はいささか複雑であり、危うくどの部分を素直に信じるべきか分からなくなるようなところがある（繰り返しになるが、タウシグは一切の記録を会場に持ってきていない）。だが、トマス・サパタという人物の存在は（少なくともタウシグのテキスト上では）架空ではない。トマス・サパタが登場するのはこの文章が初めてではないのである。たとえばタウシグのデビュー作である『南アメリカにおける悪魔と商品の物神崇拜』には「哲学者であり、一方では文学のために生きている」⁶³人物としてサパタの名前が登場するし、1993年に刊行された『模倣と他者性』(*Mimesis and Alterity*)の謝辞⁶⁴にも彼の名前は登場する。また、記録者であるミゲルはタウシグ自身をモデルにしていると考えられる。先述した通り、ミゲル(マイケルのスペイン語形)はコロンビアにおけるタウシグの別名なのである。また、「イングランドとオーストラリアから」やってきたというミゲルの紹介と、オーストラリアで生まれロンドンで学んだタウシグの経歴は一致している。すなわちタウシグは、自らが記録・作成した資料を基にトマス・サパタについての発表をおこなっている。その上で、「私自身から距離をとるために」そこに架空の資料館とその館長が登場している、と整理することができるだろう。それがいかなる批評的効果を発揮しうるのかを明らかにするためには、さらにこの文章の構造について詳しく考察する必要がある。

ではそもそも、この文章のテーマを簡潔にまとめてしまうとするならば、どのようなものになるのだろうか。この文章の英語版の初出は1996年刊行の*Culture/Contexture*という論集に収められた「アメリカの構築——コロンブスとしての人類学者」(*The Construction of America: The Anthropologist as Columbus*)である。タイトルをはじめとして『墓標』版と比べ興味深い相違点が多々あるのだが⁶⁵、特に興味深いのは、文章の終わりに登場する謝辞である。学会発表の文章化であることを紹介する点などは、表現こそ違うものの『墓標』版で最初のページの下部に記されている注記の部分と同じだが、*Culture/Contexture*版ではそれに続いて、この文章の意図が比較的明確に語られている⁶⁶。引用してみよう。

これ[タウシグが招待された学会発表]は私がもっともやりたかったことにふさわしい機会のように思える。すなわち単純に、トマス・サパタという、ひとりの年老いた農耕者の詩をさらに公にすること。私が西コロンビアで知り合って、1972年に死んだトマス・サパタ

⁶² Ibid. p. 67.

⁶³ *The Devil and Commodity Fetishism in South America*. p. 74.

⁶⁴ *Mimesis and Alterity*. p. x.

⁶⁵ たとえばこちらでは、文章の終盤、資料館やその館長に架空の〔fictitious〕という形容詞は付かない。また、記録者を記録者と呼ぶことにするという補足的な文言もこちらにはない。

⁶⁶ 『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』版の前書きにもこの文章の意図について触れられた箇所はあるのだが(p. viii.)、あまりに抽象的であるため、本論文では言及しない。

の。なぜなら、彼の詩はかなり明らかに偉大な叙事詩であり、過去を表象する方法と、歴史の哲学についての数々の問いを引き出すものだったからである。それらの問いは、この章の形式そのものと、想像上の演出^{ミゼンセーヌ}を規定している。⁶⁷

すなわちタウシグはサパタの詩を読者に伝えるため、この文章における複雑な構成を採用しているのである。だが、その詩は一体どのように伝えられているのだろうか。

資料館でタウシグが確認する記録は、基本的にトマス・サパタと記録者とのやり取りである。最初、記録者はサパタを紹介してくれたエウセビオという葉巻職人を交え、彼にインタビューを行う。ここで、サパタはコロンビアの政治の歴史について、西洋の偉人やギリシャ神話を引き合いにだして語る。記録者にとってそれは「一方でピタゴラスのような西洋的規範から、他方で地域の歴史の複雑な説明から引き出された情報源の間を行ったり来たりしているよう」なものであり、記録者はそれを「流動と混淆」「流動と逸脱」と呼んだ（とタウシグは語る）⁶⁸。そして興味深いのは、エウセビオがそのことについて快く思っていないことである。

ここに登場する男は、おそらく同様にそのイングレス[イギリス人]に強い印象を与えようとしていたのだが、古代人を賞賛することからはかなりの距離を置き、自分が歴史的記録であると考えているものからドン・トマスが離れ続けるため、我慢ならないのだった。では、記録者の存在に対するひとつの反応としての、ふたつの非常に異なる思考様式をどう説明できるだろうか。というより、記録者の存在とは何だったのだろうか。⁶⁹

西洋的エリート主義と歴史的記録、そして記録者の存在。それらの複雑な絡み合いがここで示されている。この引用の直後、タウシグはベンヤミンの「物語作者について」を援用しつつ記録者を定義している。長くなるが、この部分も引用しておこう。

ある有名なエッセイでヴァルター・ベンヤミンは、ストーリーテラーとは、旅人が決して出発することはない人々のところへと戻ってくる場所、その交差点にいる者であると理解されうると言っている。このことはストーリーテラーと同様に、物語が異なる軌道上の人と人の対面から巻き起こり、遠くにあるものを今ここへと運び込む状況をも強調している。私は記録者の存在は、この関係によって結びつき、定義されていたと思っている。それは、これがある程度は、過去の過去性の不透明さの中に蓄えられた知恵の肖像たる、年老いた、盲目の男の形をした歴史との出会いでもあったに違いないという事実によって複雑なもの

⁶⁷ “The Construction of America: The Anthropologist as Columbus.” *Culture/Contexture: Explorations in Anthropology and Literary Studies*, edited by E. Valentine Daniel and Jeffrey M. Peck, U of California P, 1996, pp. 323–356. (Taussig 1996), pp. 354–355.

⁶⁸ *Walter Benjamin's Grave*. p. 40.

⁶⁹ *Ibid.* p. 42.

なっているのだが。⁷⁰

物語とは、異なる軌道上にいる二者が出会うことから始まる。これは、たとえば恋愛物語のようなナラティブの内容のことを言っているのではなく、ナラティブの生成についての言及である。ここでは、学者と（いわゆる）インフォーマントとの出会いのことが想定されていると考えてよいだろう。学者が「インフォーマント」と出会った後、「今ここ」、すなわち学会や西洋的エリート主義の現場へと持ち帰るのは、記録物や民族誌という「物語」なのである。だが、ここで事態を複雑にするのは、インフォーマントが語る物事がどのような性質のものか、ということである。

記録者は、サパタが「口承の伝統の内部に連なっている」と考えていた。しかし、同時に、「トマスは、彼が口承の伝統からではなく書物からその根拠を得ていると述べることによって、この期待の誤りを証明してもいるようだった」。そして、「それは究極の板挟みだった。テキストの権威性に特権を与える、口承の伝統の権威性」⁷¹。これは、文化人類学という学問分野の持つ板挟みであると同時に、タウシグのナーヴァス・システムの概念にも大きく関わることである。人類学という学問分野では、フィールドワークで得られたインフォーマントからの口承的な情報が、それによって形成される民族誌に正統性を与える。あるいはそれは、情報が修正されるのであれ補強されるのであれ、過去の民族誌の力を担保することにもつながる。人類学における科学的な枠組みの権威性を疑問に付すとき、それは避けては通れない問題である。なぜなら、口承的な伝統につらなる情報をそのまま提出しただけでは、それはいかなる批評的価値も持たない。というよりむしろ、口承的な伝統につらなる情報をそのまま提出することは、人類学者がそこに介在する限り、原理的に不可能だからである。だが、「文化人類学はその実践のどれだけ多くが、他者の物語る語りの技法に依っているかについて盲目である——まずいことに。何が起きているかと言えば、それらの物語は物語の語り手ではなく『インフォーマント』から採集された科学的観察として磨きをかけられるのである」⁷²とタウシグが述べるように、タウシグにとってそれは、十分に議論されてきたとはいえない問題だった。

タウシグは「神経質に不安定なナーヴァス・システム」という試みによって、文化人類学のそうした特権性を解体しようとしてきたともいえる。すなわち、インフォーマントの言葉、あるいはフィールドそのものの「無秩序」をなるべく無秩序のまま表象しようと試みてきたのである。だがサパタのように、インフォーマントがすでに書物という「秩序」からその根拠を得ている場合はどうなるだろうか。インフォーマント自身が西洋的な知識にアクセスしていることによって西洋的特権性の脱構築が不可能になるのだとすれば、その試み自体が西洋的な特権性に内包されていることが浮き彫りになってしまうのではないだろうか。

タウシグは、サパタが書物から知識を得ていることについて以下のように問題提起を行う。

⁷⁰ Ibid.

⁷¹ *Walter Benjamin's Grave*, p. 43.

⁷² Ibid. p. 62.

ドン・トマスの世界は、その中でストーリーテリングの技法が強く息づき、しかし同時に書かれたテキストが偉大なる名声を与えられるものだった。もしかして、過去を呼び起こし、それをきらびやかでエキセントリックな注釈と忠告のイメージの欠片へと凝縮させる彼の能力は、ただこのストーリーテラーと書物の重ね合わせに基づいたものだったのだろうか？⁷³

この部分が問題の核心である。たとえば、タウシグというひとりの「ストーリーテラー」について考えてみればどうだろう。彼は大量の西洋の書物を引用し、その知識をふまえた上でユニークな語りを我々に提示する。その表象の試みを単に「知識に裏打ちされた語り」に還元するとすれば、そこに出現するのは西洋的なインテリにほかならない。だが、「神経質に不安定なナーヴァス・システム」の概念をはじめとする彼の試みは、そうした西洋的特権性に還元されうるものよりも、さらに神経質なものではなかったか？ こうしてみると、タウシグとサパタには明らかに重なる部分がある。それはタウシグ自身にとっても自明のはずだ。タウシグがサパタをどのように捉えるかを知ることは、我々がタウシグをどのように捉えうるかを知ることにもつながるのである。では、以下で問題の核心に迫るとしよう。

記録者がサパタに話を聞き始めてからしばらく経ったころ、サパタは韻文の形式で彼の質問に答えることが多くなった。タウシグはそのような詩的な韻文を、記録者が「流動と混淆」「流動と逸脱」と呼んだものの面から評価する。そして、「続く伝統や、さらにそれを創ることの反映から遠く離れて、混淆と逸脱は文化的かつ時間的なモンタージュという、解釈の技法を示唆する」⁷⁴と述べる。続けてタウシグは以下のように記す。

私はなんとかして、郷愁と特権性の魅惑的な力を迂回したい。それらについての私たちの要求と、どうしてそれらがそこまで親密にこの世界における私たちの存在の一部となるのかについて熟考することで。私は、ドン・トマス・サパタのこの声が、アメリカの構築に力強く寄与すると指摘したい。なぜなら、「民衆」の存在というものが独自のやり方で大変尊重し、頼っているのがまさに、それもまた西洋的規範に手を加えたものであるということだからである。⁷⁵

ここで言われる郷愁[nostalgia]は、人類学やポストコロニアリズムの中で問題となるエグゾティシズムやオリエンタリズムと言い換えることもできるだろう。西洋的価値観から遠く離れた場所に魅力を感じるのは、自らが西洋的価値観という特権性に浸っているからに他ならない。では、そのような誘惑を「迂回」するためには、どうすればいいのだろうか。タウシグは、サパタの詩の中で「まさにその規範ともっとも近しく同一視され、ずっとこの先まで生きた具現化であると

⁷³ Ibid. p. 44-45.

⁷⁴ Ibid. p. 52.

⁷⁵ Ibid.

される階級に対して貧しきものが団結する必要性」⁷⁶が強調されていることに注目する。この部分は、サパタの詩の中にある「だから連帯しよう、我々貧しき者たち、我らの色を区別することなく」⁷⁷という部分などを受けていると思われる。すなわち、ごく単純に言ってしまえば、西洋的規範によって形づくられた階級などの理不尽を、同じく西洋的規範が形成した「民衆」という概念によって乗り越えようとするサパタの「混淆」と「逸脱」が評価されているのである。では、タウシグがサパタのような「混淆」と「逸脱」を手に入れるためには、どうすればいいのだろうか。以下で見るように「アメリカを構築すること」は、西洋的規範を内包した混淆と逸脱による、エグゾティシズムと特権性の迂回、というこの難題についてのメタ的な見取り図を提供している。

先ほどの箇所が続いてタウシグは、ふたりが対面していた場がフロイトの言う「遊び場」のようなものだったのではないかと自問自答する。タウシグは述べる。

詩人と記録者は、**連帯して**、なにか予想以上に特別なものをつくりだすことができたのだろうか。きっちりとした脚韻と韻律の反復と結びついた、記憶と言語の遊び場としての詩から生れ出た、**間文化的な転移**の場を。⁷⁸

この反復こそが想起を促す場であるとタウシグは指摘する。

では、その反復とは具体的にどのようなものなのだろうか。「アメリカを構築すること」で引用されるサパタの詩は、タウシグによってスペイン語から英語に訳されている。その際、タウシグは訳詩では元の詩の「力強い律動の拍子と脚韻」が抜け落ちていると述べている⁷⁹。よって、本論文でそれをさらに日本語に訳して提示したとしても、それによってサパタの詩に特有の反復を表現することは難しいだろう。だが、その詩の構造自体が反復を含んでいることは指摘できる。たとえば記録者はサパタに、4月9日に起きたことを憶えているかと尋ねる⁸⁰。1948年の4月9日にガイタンは暗殺され、ボゴタ暴動が始まった。「4月9日」というのは、「悪名高いビオレンシアを示す符号」なのである。その質問に対してサパタが謡った詩の最初の1連を訳出してみよう。

神よ救いたまえ。サンブラノの支配によって何が始まるのだろう。

すでに我々は、同国人が同国人を殺す、2頭の獣のようだ

サンブラノが来たとき、町は震えに震えた

彼らは我々を裸にし、針さえ残さなかった

⁷⁶ Ibid.

⁷⁷ *Walter Benjamin's Grave*, p. 51.

⁷⁸ Ibid. p. 54.

⁷⁹ Ibid. p. 46.

⁸⁰ *Culture/Contexture*版では、その質問に対してサパタが“Si, señor.”という返事を2回繰り返したこともまた韻文だったと指摘されている (p.335.) が、*Walter Benjamin's Grave*版ではその部分は削除されている。

なんたる無防備、4月9日のせいで、
ナイフが銃の背後を行進した
ああ、神よ！ 黒人にとってなんたる時代だろう！⁸¹

引用されている部分では、ビオレンシアの時代にプエルト・テハダにやってきたサンブラノという圧政者についてだけ語られる。だが、詩の全体としてはそうではなかったとタウシグは述べる。

後になって他のテープを聞いて初めて分かったことだが、この詩には他にいくつも連があり、そこでは当時、町に送り込まれた軍政の町長のそれぞれについて語られる。⁸²

すなわち、この詩自体が韻律という反復を内包しながら、それぞれの町長についての語りをさらに反復することで成立しているのである。このことは *Culture/Contexture* 版で、よりはっきりと説明されている⁸³。そこでタウシグは以下のように述べる。

当時、町に送り込まれた軍政の町長それぞれについて、韻律の循環がある。詩は、そのうちの部分で終わってもいい。その詩は終わりなきものなのだ。それは叙事詩だ。これが起こった、あれが起こった。そしてそれは違った形でも起こり得た。⁸⁴

こうしてみると、サパタの詩の構造自体が反復を内包していることは、疑いようのない事実であろう。

そしてそういった反復は、「転移の空間を通して露出する抵抗のおかげで神経質なものからは程遠い」とタウシグは言う。そして、「狂人の話を聞く分析者の実践」でもないと言われる。「その『遊び場』はふたりの分析者とふたりの狂人がいる二方通交路」⁸⁵なのである。この「二方通交路」[two-way street]は、英語で「互恵的關係」を意味する。また、ここにはベンヤミンの「一方通交路」というタイトルの文章もふまえられているだろう。野村修は「一方通交路」について、「具体的なものと想像力との弁証法的な交錯」を意図した書物であり、ベンヤミンが「夢や愛、幼年時や旅にかんするさまざまな経験、思考、観察から、生き生きしたイメージ空間を現出」させた書物であると指摘している⁸⁶。すなわち、タウシグの言う「遊び場」は、ふたりによる「生き生きとしたイメージ空間」とも言い換えることができる。続けてタウシグが言うように、

⁸¹ *Walter Benjamin's Grave*, p. 46.

⁸² *Ibid.*, p. 49.

⁸³ なぜタウシグは『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』版でこの部分を削ったのだろうか。ひとつの可能性としては、長々とした説明を避けることで、自らの文章自体に律動をもたせる意図があったことが考えられる。

⁸⁴ Taussig 1996, p. 337.

⁸⁵ *Walter Benjamin's Grave*, p. 54.

⁸⁶ 野村修『ベンヤミンの生涯』（平凡社ライブラリー、1993年）123ページ

記録者の登場という偶然の出来事によってもたらされたこの知的空間に浮上するもの、それはまさに詩の反復であり、その反復の美学だった。反復は、共に生きる試みの一つの方法という、不断のものを提供した。⁸⁷

のである。では、そうした反復によって提供される「間文化的な転移」とは、どのようなものなのだろうか。一言でいうならば、それは文化と文化の間の「調停」である。

タウシグは、グリム兄弟やニコライ・レスコフ（ベンヤミンが「物語作者について」で言及したロシアの作家）、またはベンヤミン自身が「ブルジョワジーと農民の間の調停」を目指していたと指摘する。そしてそれは、「E.B.タイラーが1872年に先駆的な『原始文化』を出版してから、文化人類学者たちが彼らのすべての仕事のうえに打ち立ててきた物語にとっても重大事でありつづけた」⁸⁸とされる。ここで「ブルジョワジーと農民の間の調停」という言葉はかなり曖昧に使われているが、広く〈西洋的規範とそれ以外との架橋〉であるといえるだろう。たとえばグリム兄弟は、市民から集めた昔話を、学問的情熱をもって整理した。文化人類学もまた、フィールドと西洋的規範（たとえば学会）をつなぐ営みである。同じことは、こうして学会（あるいは大学の出版局から刊行された書籍）で農民の詩について話している（書いている）タウシグにもいえる。

だがもちろん、それらの「調停」の質は問われる。たとえば文化人類学における調査対象についての理解はしばしば一方的だ。また、人類学的調査が植民地支配の前段階として行われた例は枚挙にいとまがない。あるいは、グリム兄弟を重要な参照点のひとつとして含むドイツ民俗学がナチズムと多くのかかわりを持ったことも忘れてはならない⁸⁹。だが、そこでその調停自体を否定すると身動きが取れなくなるのは明らかだ。

そこで必要となってくるのが、先ほどタウシグが述べていた「郷愁と特権性の魅惑的な力」の「迂回」なのである。実際、この文章は単に構造の攪乱を試みているのではなく、まさしく「迂回」的な構造を取っている。ここからは、図を用いてそのことを説明してみたい。

たとえば、タウシグがサパタのことを読者に伝える、という図1のような構図を想定してみ

⁸⁷ *Walter Benjamin's Grave*, p. 54-55.

⁸⁸ *Ibid.*, p. 62.

⁸⁹ このことについては、たとえば河野真『ドイツ民俗学とナチズム』（創土社、2005年）が詳しい。河野はフォークロリズム、すなわち「民俗行事や民俗事象が〈本来それが定着していた場所の外で、新しい機能を持ち、また新しい目的のために演出されること〉」が民俗学ではたびたび問題になると指摘し、「その原点として決まって顧みられてきた現代史のエポック」がビュッケベルクの収穫感謝祭をはじめとする「ナチス・ドイツの文化政策」であったと指摘する（398-399ページ）。だが、河野が「19世紀の後半に、同時代の社会を活写して、当時全盛であったグリム兄弟に発する神話学系統の民俗学を修正した人物として重くみられてきた」ヴィルヘルム・ハインリヒ・リールについて、「しかしリールとナチズムのあいだは一直線ではなく、そのあいだに幾らも岐路があり、転軸のチャンスがあった。また連結点を想定した場合でも多彩な媒介項が存在した。リールがナチズムの源流であったと考えるのは、やはり短絡であろう」と指摘する（434-435ページ）ように、グリム兄弟がナチズムの源流であると指摘するのもまた短絡であることは言いおかなければならない。

よう。これは従来の文化人類学で主流の構図である。だが実際は、タウシグは図 2 のような構図を採用している。サパタはミゲルという「記録者」に詩を伝える（矢印 a）。その記録をタウシグと館長が資料館（空間 b）で共に閲覧するのだが、実際は、ミゲルとタウシグと館長は同一人物である。そして、タウシグは聴衆にその報告をする（矢印 c）。あるいは文章化された

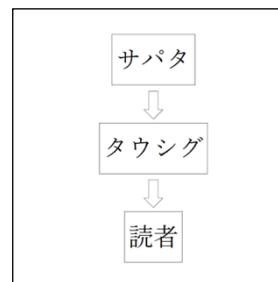


図 1

「アメリカを構築すること」では、聴衆と読者は微妙に重なり合いながらも同一ではない。これでは構図を複雑にただけに見えかねないが、この構図で重要なのは、タウシグ自身がサパタと同じような語りの力を手にしうる「場」が生まれていることである。

文章の終盤、タウシグは、彼と「館長」が話をしていたプラハ資料館について、「ここでは反復が『ほとんど完全に自由な形で』遊ぶことが妨げられない」⁹⁰と述べている。その「反復」とは文章の随所で挟まれる館長とタウシグの様子や、タウシグがミゲルを見て感じる苛立ちのことを示している。すなわち、過去の記録を参照し反省するという身振りの「反復」である⁹¹。

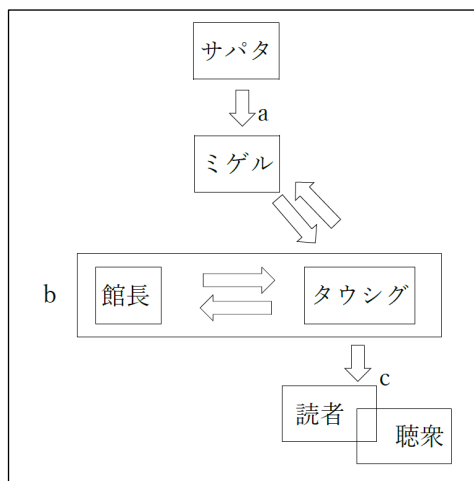


図 2

そして——ここがこの文章のもっとも魅力的かつ非論理的なところなのだが——それが、サパタが反復した「詩」と重ねられているのである。そしてその反復を通して、サパタがミゲルに提供した「間文化的な転移の場」は、タウシグから聴衆／読者にも提供されることになる。すなわち、空間 b という「間文化的な転移の場」を通して、矢印 a、矢印 c は重ねられている。その意味で矢印 a、空間 b、矢印 c はすべて「遊び場」であり、「間文化的な転移の場」なのである。その三者はお互いに重なり、共鳴している。ここで聴衆／読者は、サパタの詩をタウシグから受け取るのではない。タウシグによってつくられた反復の空間——サパタが構築したのと同等の空間——を介して受け取るのである。すなわちタウシグは、フィールドと読者の間の調停に際し、3箇所反復を形成することで西洋的な特権性の「迂回」を達成しているのだといえる。文化と文化の間の調停を引き受けつつ学問の特権性を回避するというその営みが、彼の目指す実践なのである。そして、彼はそのためにフィクション的な形式を採用したのだといえる。

ここで注意しておきたいのは、タウシグはいたずらにフィクションを用いているわけではないということである。タウシグがフィクション的な形式を採用するときには、彼自身が課したある程度の制約があるように思える。たとえば「アメリカを構築すること」の *Culture/Contexture* 版（「アメリカの構築」）では、最後に置かれた謝辞の部分に「想像上の[imaginary]演出」と

⁹⁰ Walter Benjamin's Grave. p. 67.

⁹¹ タウシグはそれを歴史の「構築」でもあるととらえている。そこで念頭に置かれているのはもちろん、ベンヤミンの「歴史の概念について」である。

という言葉が登場していた。これは、この文章にフィクションの要素が含まれていることを明示するためであると思われる。『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』版でこの謝辞はなくなっているが、かわりに、プラハ資料館とその館長が架空の存在であることがより強調されている。具体的には、*Culture/Contexture* 版では「謎めいた記録者のへまの数々と、プラハ資料館の館長の適切な助言に感謝を」⁹²となっている部分が、『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』版では「謎めいた記録者のへまの数々と、私自身から必要な距離をとるために私が構築してきた架空のプラハ資料館の架空の館長の、適切な助言に感謝を」⁹³となっているのである。タウシグは文章の再録にあたり、より具体的にどの部分がフィクションなのかを提示する必要性を感じたのだろう。

あるいは『ザ・マジック・オブ・ザ・ステイト』の冒頭に置かれた謝辞には以下のような一節がある。

三人の芸術家、オフェリア・モスコソ、スサナ・アムンダライン、サラ・マネイロは非常に親切で、本書で論点になっている形象と精霊の憑依について私が洞察を得る際、非常に助けになってくれた。とはいえいかなる意味でも、私の様々な空想[fancy]への飛行について、彼女らに責任があるということはありません。⁹⁴

ここで「空想」という言葉が明確に置かれることによって、読者はこの書物がフィクションの要素を含んでいることを理解できる。

こうしてみると、タウシグはフィクションの要素を意図的に文章に加える際——タウシグの言葉で言えば演出^{ミジンセーズ}を設定する際——それを明示することを心掛けていると指摘できるように思う。そうした制約によって、タウシグの文章はいわゆる「学問」の場に、批評の対象というだけではなく、それ自身が批評を行うものとして現れることができるのである。すなわち、タウシグはフィクションを濫用していたずらに学問的価値観を攪乱しようとしているわけではなく、あくまで学問の枠組みをつかかってその権威性への疑問をなげかけることで、内側からそれを批評することを画策しているのだと言える。いうなれば、それはある種の実験なのである。

4 民族誌と日記⁹⁵

『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』の次の単著、2009年に発表された『聖なるものはどんな色?』(*What Color Is the Sacred?*)で、タウシグはマリノフスキについて紙幅を割いている。

⁹² Taussig 1996, p. 354.

⁹³ *Walter Benjamin's Grave*, p. 67.

⁹⁴ *The Magic of the State*. Acknowledgements.

⁹⁵ 本章は、第25回 ASLE-Japan 全国大会（東京・大東文化大学、2019年8月31日）の院生企画「見えない景色を旅する」での筆者担当部分「日記という『見えない景色』——マリノフスキにおける魔術と境界」をもとにしている。

そこでのタウシグのマリノフスキ論は、民族誌と日記の関係についての考察とともに進むことになる⁹⁶。まずは、マリノフスキの日記が巻き起こした議論について簡単に整理しておこう。

ブロニスラフ・マリノフスキ（1884-1942）はポーランドで生まれ、イギリスで活躍した文化人類学者である。彼は参与観察などの方法を確立し、現在の文化人類学の礎を作った人物のひとりであるとされている。彼の主著『西太平洋の遠洋航海者』はニューギニアのトロブリアンド諸島でおこなったフィールドワークをもとにした本であり、現地の住民との親密な信頼関係によって生き生きとした描写を行うことに成功した名著、という評価が定着していた。しかし、彼の死の25年後、1967年に刊行された日記が波紋を巻き起こす。この日記を邦訳した谷口佳子の言葉を借りれば、

『日記』の出版直後に書かれた書評やそれに対する反論の基底には、“偉大な調査者マリノフスキー”という神話的人格の正体暴露に対するショックが横たわっている。[...]そのあまりの赤裸々さや感情の起伏の激しさを目のあたりにして、多くの人類学者は狼狽を禁じえなかった。⁹⁷

というような状況だったようだ。確かに日記を読んでもみると、現地の住民への嫌悪がかなり赤裸々に表明されている部分が多い。それは、『西太平洋の遠洋航海者』で彼が、当時のヨーロッパにおける、いわゆる「原始人・野蛮人」への誤解を必死で解こうとしていた姿勢とのギャップによる驚きをもたらす。このことについて、イギリスの人類学者、エドモンド・リーチは1980年の文章で、「私自身は常に、この日記はそもそも出版されるべきではなかったと考えてきた」⁹⁸とさえ述べる。ポーランド文学者、関口時正はそのことについて「これが原理的に手に余るものであることを、『文化の科学的理論』のような単純なものを相手にするのは訳が違うことを知る人の判断」⁹⁹だったとして理解を示している。

⁹⁶ もちろん、これ以前にもタウシグは日記に強い関心を寄せている。たとえば、*Law in a Lawless Land* でタウシグはジャン・ジュネの文章について考察した後、以下のように書く。

これに加えて、私も同じように感じている彼の感覚、つまり、ふたつの世界がほとんど意思疎通できないという感覚。知識階級と貧困層、コロンビアと合衆国、都市の住民と農民——これら「ふたつの世界」の大変多く——そしてそれは、君の書くほとんどすべてが、中間の世界を探することで破碎され、不完全であるのと同じだ。その中間の世界とは、日記の世界で言えば、君自身と呼ばれる虚構である。
(p.102)

ここでもタウシグは「調停」の問題に注意を払っており、それはやはり日記の問題と直結するのである。

⁹⁷ 谷口佳子「マリノフスキー：『日記』と彼をめぐる女性達」『共栄学園短期大学研究紀要』第2号（1986年）55-72 ページ、58 ページ

⁹⁸ Leach, Edmund. “Malinowskiana: on reading a diary in the strict sense of the term: or the self mutilation of Professor Hsu.” *RAIN*, No. 36. 1980, pp. 2-3, p. 3.

⁹⁹ 関口時正「ブロニスラフ・マリノフスキーの日記をめぐる」『ポーランドと他者——文化・レトリック・地図』（みすず書房、2014年）194 ページ

それと並行して、自然描写とそれに係る色彩の描写に関しては、マリノフスキの日記は高い評価を得ている。たとえば、レイモンド・ファースは『日記』への序文において、「日記の中のいくつかの記述の鮮烈さは非常に衝撃的で、それらはニューギニアの景色の色彩に対するマリノフスキの慧眼と、彼の海と航海への愛を明らかにしている」と述べている¹⁰⁰。

『聖なるものはどんな色?』においてタウシグは、マリノフスキの日記における色に着目して論を進めている。まず、タウシグはトロブリアンド島で撮影されたマリノフスキの写真で際立っている彼の「白さ」について、以下のように述べる。

これはマリノフスキが、人類学者への要求としてネイティヴの視点を明らかにすることを示した際に有名になった、「民族誌学者の魔術」の例ではないか?¹⁰¹

ここでタウシグは「民族誌学者の魔術」について、マリノフスキが『西太平洋の遠洋航海者』の序論で述べた以下の部分を念頭に置いている。

それでは、民族誌学者が住民たちの本当の心、部族生活の本当の姿を引き出すことのできる魔術とはなんであろうか。あたりまえのことだが、成功は、たくさんの常識的法則と、よくわかっている学問の原理を、組織的に忍耐強く応用することによってのみ得られ、努力もせず苦しみもなしに、望む結果に到達できる奇跡的な近道を発見して成功を得ようとしても、それは不可能である。¹⁰²

その上でマリノフスキは、「骨組みとなる部族の構造、具体的な文化項目のほかに、また、文化のいわば血肉である日常生活や通常の行動のほかに、精神——つまり、現地住民の観点、意見、発言をしるべきである」¹⁰³と述べるのである。これが「ネイティヴの視点」についての記述である。マリノフスキはそれが困難な営みであることを認めた上で、その「実際的方法」として、イギリスのケンブリッジ学派の民族誌学者たちを手本とする。「彼らは地域住民の分類用語、つまり社会学的、心理学的、技術的用語を引用し、できるだけ正確に住民たちの思想の言語に現れた面を記した」¹⁰⁴。しかし注目すべきなのは、そのような「科学的」態度を表明しながらも、マリノフスキが民族誌学者の営みについて「魔術」という言葉を用いている点である。そしてタウシグは続く論で、それを文字通り受け取ることを提唱している。

タウシグは「色」と「特色」という、“color”のふたつの意味を念頭に置きつつ、この日記を読み解く。すなわち、

¹⁰⁰ Firth, Raymond. “Introduction.” *A Diary in the Strict Sense of the Term*, pp. xi–xix, p. xix.

¹⁰¹ *What Color Is the Sacred?* pp. 82–83.

¹⁰² ブロニスワフ・マリノフスキ『西太平洋の遠洋航海者——メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』（増田義郎訳、講談社学術文庫、2010年）36–37 ページ

¹⁰³ 同 62 ページ

¹⁰⁴ 同 63 ページ

民族誌はフィールドワークに基づいており、フィールドワークは個人的なものである。個人的なものを私的な日記というゲッターに閉じ込めることによって、経験の核は隠されてしまう。しかし、このことが意味し得るのは、消えた自己が、日記の中で驚くべき方法で現れるということである。その方法とは、私が**身体的無意識**[*the bodily unconscious*]と呼ぶ意味で色を「特色」に重ね継ぐことだ。身体的無意識とは、気付かないままに、マリノフスキの日記が多様なやり方で示しているものである。海や山や、常に変化し続ける空のような、他の身体のさなかに身体を想定する場合のことである。¹⁰⁵

ここでタウシグは、色の描写においてマリノフスキが対象物と一体化していることを指摘している。「身体的無意識」的な状態で、対象物を客体化し観察しようとする西洋的な主観が姿を消しているというのである。タウシグが特に評価するのは、『日記』の中の以下の場面だ。

火はいくつかの場所で点されていた。素晴らしい眺め。赤色、ときには紫の焰が丘の斜面を細長いリボンとなって駆け上がった。暗い青、あるいはサファイア色の煙を透かして、斜面は磨かれた表面の輝きを湛えるブラックオパールのような色に変化した。焰は私たちの手前の斜面から谷間まで降りゆき、力強く生い茂る背の高い草をすっかり飲みこんだ。光と熱のハリケーンのように轟音を発し、それは私たちに向かってまっすぐにやってきた。そのうしろを風が追い、半分焼けた草の破片を宙に飛ばした。鳥やコオロギが雲のような群れとなって飛び去る。私は焰にまっすぐ歩み入っていった。¹⁰⁶

ここで火の中に足を踏み入れるマリノフスキは、確かにほとんど魔術的な性格を帯びている。しかしながらタウシグは、「[マリノフスキの]民族誌においては、筆者の身体は我々が〈標準的西洋的主観〉とでも呼べるものに戻されて」と述べて「それはまるで、マリノフスキが日記の魔術を島民の魔術と交換したかのようだ、そうすることで自分自身が非魔術的になれるように」¹⁰⁷と指摘する。そして、そのことは厳しい批判にさらされることになる。なぜなら、「観察している観察者を私的な日記に埋めて消し去ることは、植民地主義的な体制と、研究の対象にそれが与えているインパクトを消し去ることをも意味した」¹⁰⁸からである。つまり、民族誌において西洋的な主観を隠蔽することは、観察という行為における支配的構造を隠蔽することに他ならないとタウシグは指摘しているのだ。だがタウシグは一方で、そういった脱魔術化の営みもまた魔術的だと指摘する。

¹⁰⁵ *What Color Is the Sacred?* pp. 85–86.

¹⁰⁶ Malinowski, Bronislaw. *A Diary in the Strict Sense of the Term*. Stanford UP, 1989, p. 11.

¹⁰⁷ *What Color Is the Sacred?* p. 91.

¹⁰⁸ *Ibid.* p. 114.

かえってますます驚くべきことだが、伝説的フィールドワークによってつくり出され、今日まで続いてきたその科学は、基本的に日記的側面を排しており、実際の民族誌から観察者を執拗に排除したがるという点で、非常に魔術的であった。¹⁰⁹

ここでタウシグは、文化人類学という学問自体を魔術的であると表現している。文化人類学の論文では、「私」という一人称を使うことが避けられ、それが「客観的」な「科学的」態度であるとされる風潮が続いてきた。2011年刊行の『私は見たと誓う——フィールドノートのドローイング、すなわち私自身の』(*I Swear I Saw This: Drawings in Fieldwork Notebooks, Namely My Own*)でも、タウシグはその姿勢に疑念を呈している。タウシグはアメリカの人類学の大学院生が研究費の申請書を作るときに叩きこまれる書き方を例に出す。「私はこれを研究したい！」というのを「このプロジェクトは何々を目的にして……」と言い換えることで、抜け落ちるものがあると彼は述べるのだ。すなわち、

その一撃の言い換えにおいて、主観的なものは消されるというより、この言葉によって偽装され、歪められている。その全体の過程は誠実ではない。なぜなら、フィールドワークは必然的に個人的な経験とストーリーテリングに基づいているのであって、実験室における手続きのモデルに基づいているわけではないからだ。¹¹⁰

つまりタウシグは、マリノフスキが日記において西洋的主観を逃れ自然の中に身体を置いたことが魔術的であるのと同じく、文化人類学の論文において観察者の主観が隠蔽されることが魔術的であると述べ、批判しているのである。だが、タウシグは魔術的なことそれ自体を批判しているわけではもちろんない。では、「現地人」＝ネイティヴの魔術と人類学者の魔術、そのふたつの魔術にはどのような違いがあるのだろうか。

関口は自然描写の際にマリノフスキが西洋的主観から逃れていたことについて、タウシグの論に近いことを述べている。

しかし、彼の自然を見つめる目は、少なくとも生活者[ネイティヴ]と同じ高さにはあった。しかもその目が世界を、すなわち〈自然+人間〉を記述しようとするときには、必ず自分を含みこんでいて、そこで記述、描写される自分は、その自然の前で再び原住民と同様に対等に対象化されている。こういうことは、それがそれぞれの分野の表現の歴史で画期的であるというのであれば、確かにそうなのかもしれない。マリノフスキのテントは、単に「その言語を習得した、ある単一の原住民共同体の内部に長期間親しく暮らす」ために部落の中に張られたという意味においてだけではなく、波打ち際に張られたことでも画期的だったので

¹⁰⁹ Ibid. p. 113.

¹¹⁰ *I Swear I Saw This*. p. 48.

ある。¹¹¹

この、波打ち際にテントが張られたという事実は非常に重要である。浜辺は言うまでもなく海と陸の「境界」だ¹¹²。「境界」ということについて、ドゥルーズとガタリは『千のプラトー』でこう書いている。「魔術師はいつも、野や森の縁という例外的な場所にいた。彼らは外縁に出没するのだ。彼らは村の境界線上にいる。あるいは、村と村の間にいる」¹¹³。このことをふまえると、浜辺は、まさに魔術師としてのマリノフスキに相応しい居場所だったと言える。ドゥルーズとガタリは先ほどの箇所が続いて、偶然にもエドモンド・リーチの論を援用しつつ、魔術師と「動物への生成変化」との親和性を指摘した。しかし、ドゥルーズとガタリは以下のようにも書く。

私たちは魔術師が指導者として従事し、専制主義のもとに集結し、悪魔祓いの対抗魔術をつくりだし、家族や血統の側に渡るところを見てきた。しかしこのことは、魔術師の死という結果を招く。そしてそれは、生成変化の死でもあるのだ。¹¹⁴

この「悪魔祓いの対抗魔術」は、タウシグの言う「民族誌から観察者を排除」する西洋的な魔術と同じだと言えるだろう。マリノフスキはどちらかといえば国家という機構と距離を置いていたが、最終的には自身の西洋的主観を脱領土化することはできなかった、と言えるのかもしれない。マリノフスキはある日の日記にこう書いている。

私は散歩した……砂だらけ石だらけの浜辺に沿って。それから来た道に戻った。篝火がチカチカとした光を、ヤシの木が織りなす淡い色の背景に投げかけていた。夜のとぼりが降りた。キタヴァ島が遠く向うの海に消えた。おとぎ話のような（ママ！）景色の中、異国情緒あふれる状況において（ニューギニアは今や、なんと非異国的に思えることだろう！）、この開放的で自由な実存にまたも喜びが高まる。実際それは仕事なのだが、本物のピクニックだといいたくなる。¹¹⁵

これもまた浜辺での出来事である。自身がイグゾティックな状況に存在することを意識し、目の前に広がる景色に感動すると同時に、自身にとってそこが非イグゾティックな場所であると意識する、というアンビヴァレンスがここにはある。マリノフスキにとって浜辺とは、あくまで異国と異国でないものの境界、すなわち非西洋と西洋の境界であり、それこそが彼にとっての限界だったと言えるだろう。境界の一方の極に西洋を置く魔術は、生成変化をなし得ず、西洋に再領

¹¹¹ 関口、215 ページ

¹¹² 『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』に取められた「その浜辺（あるファンタジー）」という文章で、タウシグは浜辺のことを弁証法的形象の場と呼んでいる。

¹¹³ Deleuze and Guattari, p. 246.

¹¹⁴ Ibid. p. 248.

¹¹⁵ Malinowski, p. 257.

土化されてしまう。すなわち、自分の視点と景色との間の境界を曖昧にすることに成功していた日記的な魔術は、その日記を隠すことで、西洋的な科学という一種の対抗魔術になってしまうのである。こうしてみると、タウシグにとって日記は西洋的主観による支配的構造を回避するために不可欠なものであることが分かる。それが「私」という一人称を用いて書かれるもののだとしても、そこでは「私」という主観が解消される可能性が常に残されている。逆に、「私」という一人称を避けて書かれた民族誌の中には、不可避的に「私」という主観が浮かび上がってくる。その意味で、タウシグにとって「ネイティヴの視点」とは、一人称を隠そうとする西洋的な対抗魔術の呪文なのである。

だがここで疑問となるのは、日記をどのように記述に組み込むか、ということである。ただ日記を隠さずに出版すれば自らの文章が「対抗魔術」になってしまうことを防げるのだろうか。実際、タウシグは『法なき土地の法』として自らのフィールド日記を出版している。とはいえ、それはタウシグの著作のごく一部にすぎない。むしろ、タウシグの著作全般には〈日記的なもの〉が組み込まれていると考えた方が妥当である。では、それはどのような形で組み込まれているのだろうか。

たとえば、『ザ・マジック・オブ・ザ・ステイト』には以下のような一節がある。

太陽は湾曲した浜辺の西の果てへと、ピンク、モーヴ、深紅の洪水の中に沈んだ。東の間、崖の上に月が掛かり、それは地球が球体であることの最大のヒントである細い三日月だった。彼らは砂上のココナツの木の間ハンモックを掛けた。星々が空に燃えた。¹¹⁶

この部分は、マリノフスキが日記の中で描いた色の描写、あるいは砂浜の描写を彷彿とさせる。すなわち、「身体的無意識」の描写である。そのことは、日記的なものを隠蔽することなく著書に結実させているという、タウシグの矜持を示しているといえるかもしれない¹¹⁷。

だが、以上も想像にすぎない。今まで見てきたようなタウシグの記述的策略の中に〈日記的なもの〉を位置づけるとすれば、どのようになるのだろうか。そのことを考えるにあたって、『私は見たと誓う』の中でタウシグが日記について語っている部分を参照してみよう。タウシグは、日記は誰にむけて書かれるのかということ、以下のように疑問に付す。

私は、日記とは一体何であり、人が日記に書くとき、誰に向けて書いているのかという疑問に悪戦苦闘している自分自身に気が付いた。そして私は、自己欺瞞として、明確な答えを捨てなければならぬことに気付いた。¹¹⁸

¹¹⁶ *The Magic of the State*. p. 155.

¹¹⁷ あるいは、彼が自らのフィールドノートに描かれたドローイングを頻繁に引用するのも、その例のひとつかもしれない。

¹¹⁸ *I Swear I Saw This*. p. 77.

その上でタウシグは、日記は自分自身のために書くものではないと断言する。その理由として、タウシグは以下のように述べる。

[その理由は、]常に君自身より大きな「君」がいるからである。君の肩越しに覗き込むたくさんの読者としての「君」が。あるいは、その「君」は、さらにもう一人の君、そこに移り変わる、実際の君自身の多くのヴァージョンなのではないか。温かな身体がほしくてたまらない、失われた魂のような。¹¹⁹

そしてそのような読者は、フィクション、ノンフィクション、フィールド日記を問わず、すべての書き手のイマジネーションの中にいるとされる。その上で、タウシグはこう述べる。

君がノートに書き込むときに君の肩越しに読んでいる透明な読者は、私がプランテーションの町で若い女性を治療しようと歌いかけていた精霊がいるのと同じ¹²⁰、幻の世界に属しているのではないか？ [...]精霊！ そうだ！ すべての書き手はその精霊たちのために書いているのである。特に、日記を書くときは。¹²¹

これはいっけん、あまりにも突拍子もない考えに思え、今までのタウシグの「調停」の作業の中ではあまりに非西洋的传统の側に寄った考えのように思える。しかし、これまで見てきたタウシグの考えをふまえれば、実は筋の通ったものだといえる。注目すべきは、「君」と「精霊」が明確に分けて考えられていないことである。また、タウシグが指摘するように、フィールドノートが自身で読み返すことを前提に書かれていることにも注目すべきであろう¹²²。まさに、「記録者」の残したアーカイヴのように。

「アメリカを構築すること」の分析で描いた構図(図2)を思い出してみよう。タウシグは架空の資料館をつくり、その館長と対話することで、サパタによる詩の反復に比する反復の場をつくりだしていた。そして、その館長はタウシグ自身でもあった。

では、館長を精霊、サパタをフィールド、そして「記録者」たるミゲルを日記と言い換えてみればどうなるだろうか(図3)。ここでも同じことが言えるのが分かる。フィールドワーク

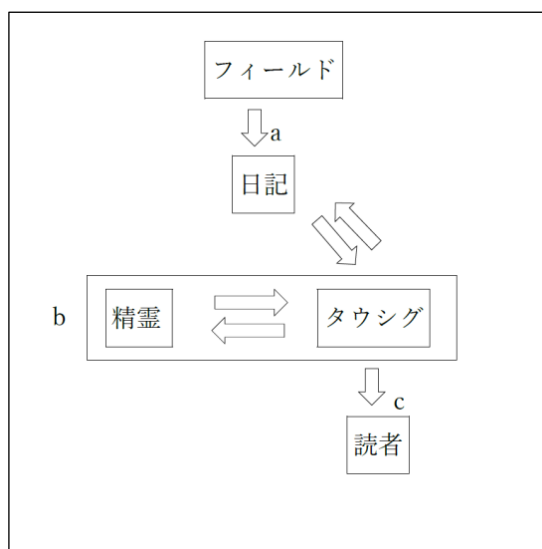


図3

¹¹⁹ Ibid.

¹²⁰ この部分については、*I Swear I Saw This* の前後の部分のほか、*Law in the Lawless Land*, p. 148-149. が詳しい。

¹²¹ *I Swear I Saw This*, p. 77.

¹²² Ibid. p. 50.

をもとにした日記は、タウシグに参照されることで反復される。そしてタウシグは、「精霊」との対話を繰り返す中で、その反復の「場」を読者に提示するのである。ここで日記が隠蔽された場合、その想定された読者である精霊もないものとして扱われ、フィールドをタウシグがそのまま解釈して提示する(図1)という、マリノフスキ的な民族誌が現れることになる。だが、タウシグが日記を隠さない限り、そこにはタウシグと「精霊」の反復の場が生まれる。そしてその反復の中で、文章が読者に提示されるのである。すなわちタウシグにとって〈日記的なもの〉を文章の中に組み込むということは、図2でみたような、「迂回」を行うこととほぼ同義であるといえる。

だが、精霊との対話の中で「神経質に不安定なナーヴァス・システム」を現出させるというタウシグの記述的策略に神秘主義的な面があることは否定できない。タウシグはこのことを、いわゆる「学術的」な記述との対比においてどうとらえているのだろうか。次章では、「フィクトクリティシズム」という観点からそのことについて考えてみたい。

5 フィクトクリティシズム

フィクトクリティシズムとは、学問的な形式にとらわれずに批評をする試みのことであると、とりあえずはいうことができるだろう。しかし、この言葉を定義するのは難しい。ここではまず、フィクトクリティシズムの研究でベルリン自由大学と西オーストラリア大学から共同博士号を取得したゲリット・ハースの2017年の著作『フィクトクリティカルな戦略たち』(Fictocritical Strategies)をもとに、フィクトクリティシズムについての概観を得たい。

ハースのまとめるところによれば、フィクトクリティシズムという名前は最初、1990年代のカナダのアートシーン、そしてオーストラリアの学問機関の中から現れた。オーストラリアの大学院課程ではクリエイティヴ・ライティングと文学理論が結びついたようなカリキュラムがあり、そのような環境がこうした試みの誕生する土壌となったようである¹²³。

ハースはフィクトクリティカルな文章について、いわゆる学術論文との比較で以下のように述べている。

学問を志すことは、規定された論述形式のものを書くよう訓練されることであり、それが自らの分野で身を立てるために前もって必要なことである。言い換えれば、^{ディシプリン}学問を修めるために、そのテキスト形式の^{ディシプリン}規律となる必要があったのである。対して、フィクトクリティカルな論考はそうではなく、意識的に実験的で、暫定的な作家的試みであり、学問的権威によって仕上げられた論文とは相反するものだと主張されている。¹²⁴

¹²³ Haas, p. 8.

¹²⁴ Ibid. p. 22.

かなり漠然とした説明だが、フィクトクリティシズムは「実験的」かつ「暫定的」であるという前提を持つため、そもそも定義づけが困難なものであるともいえる。また別の箇所で、ハースはこうも述べる。

かわりに私が示したいのは、フィクトクリティカルであることは、二重に方向づけられた逃走線を提供しようということだ。それは、第一に、我々のテキスト的行為に対するメタ視点の気付きにつながり、第二に、そこにある暗黙の実践的重要性を示す。つまり、フィクトクリティカルなものとは、形式的に発生させられた自己反省の効果であり、ただの反省的形式ではない。同じように、フィクトクリティカルなものとは、形式的な事前構造化への遂行的な洞察であり、ただの遂行的な形式ではない。しかしながら、そうした刺激は、確立された形式を捨て去り続けることによって、テキスト的に成し遂げられるのであり、そうした形式のかわりに他の形式を確固として打ち立てることによってではない。¹²⁵

こうしてみると、フィクトクリティシズムの問題意識は、特に 80 年代以降の民族誌が問題としてきたことと多くの共通点をもっていることが分かる。先にみたクリフォードの民族誌批判に代表されるような文化人類学的潮流について、奥野克巳は「1980 年代から 90 年代にかけて、人類学者は、フィールドワークと民族誌の記述という人類学の学問的営為それ自体を俎上に載せて検討することに向かい、客観主義との関係で、現地調査のあり方や文化の記述の問題点を主題化」と述べている¹²⁶。すなわち、そこでは「我々のテキスト的行為に対するメタ視点」の「自己反省」が行われていたのである。また、民族誌を書く際、それが「民族誌」という形式によって事前に構造化されてしまうことについても、クリフォードが「自らの生産様式に関する虚構」という言葉で指摘していた。この虚構性こそ、フィクトクリティシズムが注目し、「遂行的な洞察」を行おうとしているものにほかならないだろう。

おそらく、多くの文化人類学者の民族誌の中に、フィクトクリティカルな面を見いだすことは可能である。だが上でみたように、もっとも「フィクトクリティシズム」という言葉を意識して文章を書いている文化人類学者のひとり、マイケル・タウシグだといえるのではないだろうか。彼は自らの著作を「フィクトクリティシズム」とであると断言することはほとんどしない。それはおそらく、そう断言することによって「フィクトクリティシズム」という言葉の意味が定義されてしまうことを避けているからだと考えられる。

ハースは『ザ・マジック・オブ・ザ・ステイト』、『聖なるものはどんな色?』、2004 年刊行の『私のコカイン博物館』(*My Cocaine Museum*)、また、2010 年に *Critical Inquiry* 誌に発表され、2015 年には表題作として『コーン・ウルフ』におさめられた「コーン・ウルフ——厄払いのテキストを書くこと」¹²⁷などをタウシグの著した代表的なフィクトクリティシズム的記述

¹²⁵ Ibid. p. 30.

¹²⁶ 奥野克巳「再帰人類学」奥野克巳、石倉敏明編『Lexicon 現代人類学』(以文社、2018 年) 12 ページ

¹²⁷ 本論文ではハースが *Critical Inquiry* 誌版から引用をおこなっていることに合わせ、単行本版ではなく

であると指摘し、その中でもとりわけ「コーン・ウルフ」に注目している。「コーン・ウルフ」の中でタウシグはナーヴァス・システムの議論をふたたび登場させ、「神経質に不安定なナーヴァス・システム」のことを「ナーヴァス・システムの記述[Nervous System writing]」と呼んで論じる。ハースはナーヴァス・システムの記述について、本論文でも第3章で確認した『南アメリカにおける悪魔と商品の物神崇拜』30周年記念版の序文の内容を整理したうえで、「コーン・ウルフ」から以下の部分を引用している。

その書き手は受け手の側として物語の語り手たちの連鎖の端に直面し、束の間、このひとつの機会、永久に終わりの手前にあるものを得て、物語が、その引き起こす反応によって飲み込まれる前に、非常事態におけるこの介在をつくり出すのである。¹²⁸

タウシグはこの部分に続けて、「これが、私がナーヴァス・システムの記述と呼ぶものだ」¹²⁹と書く。これは、第2章でみた「なぜナーヴァス・システムか？」での記述と、完全に相関するものだ。このことから、タウシグにとってナーヴァス・システム概念が1992年当時から引き続き問題となり続けていることが確認できる。

ハースはフィクトクリティシズムとの関連で、ナーヴァス・システムの記述について、以下のようにも書いている。

一般的な水準では彼[タウシグ]はそうした恒常的に曖昧な複雑性を「ナーヴァス・システム」と呼び、その例として彼は同じタイトルで一冊の本を上梓している(1992)のだが、彼はまた、その中にある我々のテクスト的实践[フィクトクリティカルな記述]について、特に「ナーヴァス・システムの記述」と呼んでいる。¹³⁰

ナーヴァス・システムの記述とフィクトクリティカルな記述を完全に同一視すべきかどうかは検討の余地があるが、第3章でみたように、文化人類学におけるフィクション性とはそもそもナーヴァス・システムのなものであった。ここでハースが「ナーヴァス・システムの記述」という言葉、ひいては「コーン・ウルフ」を重視するのは当然の帰結だといえるだろう。

「コーン・ウルフ」というタイトルは、イギリスの社会人類学者、ジェームズ・フレイザーの代表的著作『金枝篇』において、収穫のあと、最後に残された穀物の刈り束に宿るとされる精霊、「穀物狼」から採られている¹³¹。文章の冒頭で、タウシグはヴィトゲンシュタインがフレイザー

Taussig, Michael. "The Corn-Wolf: Writing Apotropaic Texts." *Critical Inquiry*, Volume 37, Number 1. 2010, pp. 26-33 (Taussig 2010) から引用を行う。

¹²⁸ Taussig 2010, p. 32.

¹²⁹ Ibid.

¹³⁰ Haas, p. 114.

¹³¹ 『金枝篇』における「穀物狼」の記述は、フレイザー『金枝篇』3巻(永橋卓介訳、岩波文庫、1967年改訂版)240-246ページを参照した。

の『金枝篇』について書いた文章を引く。該当部分を杖下隆英による翻訳から引用してみよう。

フレイザーの書を読んでいると、私は一行ごとにつぎのように言いたくなる。すなわち、この全過程、意味の変化は今でもわれわれの眼前に、われわれの言葉による言語のうちにあるのだ、と。最後の刈り束にかくれているものに「穀物狼」の名が与えられるが、刈り束自体も、またそれを束ねる人も同様であるとすれば、ここには、われわれに周知の言語現象が認められる。¹³²

『金枝篇』は、北イタリアのネミ湖畔における王殺しの習慣について説明するために、フレイザーが世界中から様々な事例を蒐集した大著である。フレイザーは基本的に、ある儀式や習慣が持つ意味を説明し続けるのだが、ヴィトゲンシュタインはそのことを激しく糾弾している。ヴィトゲンシュタインによれば、フレイザーがそこに意味を見いだそうとするような事象は、「われわれに周知の言語現象」から表出したものであり、意味を見いだすことそれ自体がナンセンスなものなのである。『金枝篇』では、刈り束に宿る精霊的存在と刈り束自体とそれを束ねる人間がすべて「穀物狼」と呼ばれるという説明がある¹³³。そうであるのならば、それらはただ「穀物狼」と呼ばれているだけであって、そこから穀物霊についての説明を見いだすことはできないとヴィトゲンシュタインは考えるのである。ただここで注意しなければならないのは、その前提としてヴィトゲンシュタインが「われわれの言語においては、その基底にひとつの完全な神話がある」¹³⁴と考えていることである。つまり、刈り束に宿る狼、という観念には疑問を呈しつつも、「穀物狼」という言葉が表出すること自体は神話的なものであるということを、彼は疑っていないのだといえる。

このヴィトゲンシュタインの考えについて、タウシグは以下のように述べる。

ヴィトゲンシュタインが、我々は完璧に我々の言語がつくりだす動きの中でコーン・ウルフィングに親しんでいるのだと言うとき、彼はフレイザーを脱魔術化しているのだろうか。あるいは逆に、言語の中にある魔術、すなわち、その親しみ自体の形成についての関心を高めているのだろうか。¹³⁵

コーン・ウルフィングという謎めいた言葉とともに、ヴィトゲンシュタインの営みが果たして脱魔術化なのか魔術化なのかということが問われている。この部分がこの文章の要であるといえるだろう。つまり、魔術的なもののことを説明している記述について何かを記述するとき、その記述は一体どのようなものでありうるのか、ということである。

¹³² ヴィトゲンシュタイン「フレイザー『金枝篇』について」(杖下隆英訳)『ヴィトゲンシュタイン全集』6巻(大森荘蔵/杖下隆英訳、大修館書店、1995年7版)406-407ページ

¹³³ フレイザー、244ページ

¹³⁴ ヴィトゲンシュタイン、406ページ

¹³⁵ Taussig 2010. p. 27.

その議論の前提として、タウシグがマリノフスキの日記について語っていたことを思い出したい。タウシグにとっては、魔術的なものがある規律によって脱魔術化しようとするような営みそれ自体が、一種の対抗魔術であった。だがここで、もう一步先に踏み込む必要がある。対抗魔術をおこなっているとしてタウシグがマリノフスキを批判するとき、そこでタウシグは何をおこなっているのだろうか。そこで、〈私は「科学」や「文化人類学」という対抗魔術の脱魔術化をおこなっているのだ〉とするような立場は成立しない。なぜなら、その立場を認めることは、魔術について脱魔術的な説明が可能である、という最初に否定した前提を認めることになり、論理破綻に陥るからである。つまり、魔術についての説明についての説明は、他のすべての魔術と同じく魔術的である必要があるといえるのではないだろうか。論を先取りしてしまったが、タウシグはこのことを「コーン・ウルフ」という文章で示そうとしているのである。

この文章でタウシグは「農業ビジネス的記述」という、おそらく独自の用語を登場させる。これは、ハースの言葉を借りれば「一般的な人類学的記述の営み」¹³⁶と言い換えることができるものである。また、これは魔術を脱魔術化しようとするマリノフスキ的な対抗魔術のことであるともいえる。ハースはこの言葉について、以下のように述べている。

タウシグはこの概念によって、農地の単一耕作と学問分野を並列している。どちらも、他の文化と実践の多様性を犠牲にして支配するものだ。そこで、穀物狼の神話、農業ビジネスの理性的なナラティヴは、方程式から神話を切り取り、より弱い立場にある、畑で作用している[fieldworking]文化を犠牲にして利益をあげるのである。¹³⁷

タウシグの文章において単一耕作と学問分野が並列されているのは確かであるし、下で見るように「フィールド」という言葉が、「畑」と「調査地」というふたつの意味で使われているのも事実であろう。だが、ハースは文化人類学が犠牲にしているものをやや単純にフィールドの文化であると捉えている。しかしここではむしろ、犠牲とされているのはフィールドにおける無秩序、あるいはその表象可能性と捉えた方がよいだろう。

ハースも続けて引用している部分だが、タウシグは農業ビジネス的記述について、以下のように述べる。

農業ビジネス的記述は、湿地を干拓したいと望む。かつて沼と呼ばれていた場所を、虫の繁殖する湿った土地を。まるで魔法のように、世界の無秩序は矯正されるだろう。¹³⁸

ここにはやはり、南アメリカの土地を農作物の「行と列」¹³⁹に変換する大規模農業ビジネス企業

¹³⁶ Haas, p. 110. など

¹³⁷ Haas, p. 114.

¹³⁸ Taussig 2010, p. 30.

¹³⁹ *Palma Africana*, p. 176.

への怒りが見え隠れする。そうした、農業ビジネスによる自然の均質化と、記述による無秩序の均質化を、タウシグは重ねているのである。タウシグはこうも書く。

感傷的な伝統主義や懐古主義的な側面をほとんどもたずに、実際、残忍なまでに近代的に、
ヴィトゲンシュタインは私の文化人類学的自己に魔術としてのナーヴァス・システムの
記述の感覚、コーン・ウルフとしての記述の感覚、農業ビジネス的記述がフィールドを切
り開くことによって価値のないものにしていく記述の感覚を与える。今やそこには最後の
刈り束は決してなく、すべての刈り束が同じで、ただ穀物であるといえるかもしれない。
つまりは、ドルという通貨単位。それと同じなのだ。¹⁴⁰

ハースの言葉でも示唆されていたが、ここでは「フィールド」という言葉が使われ、農業ビジネスが切り開くフィールドと、文化人類学が調査の対象とするフィールドが暗に重ねられている。そして、農業ビジネスによって作物が規格化され、「最後の刈り束」という概念がなくなることと、ヴィトゲンシュタインの言葉からタウシグが受け取った「言語にとって避けようのない魔術」という意味での「最後の刈り束」がなくなることが重ねられている。これはいっけん言葉遊びのようにも思えるし、実際に言葉遊びなのだろう。そしてこのこと自体が、タウシグの記述的策略の一端であるともいえるかもしれない。「コーン・ウルフイング」や「農業ビジネス的記述」、そして後から出てくる「厄払い的な記述」という言葉は、タウシグによる他の文章ではほぼ登場しない。すなわち、この専門用語のような独自の用語の創作自体が、彼のフィクトクリティカルな営みの一端であるともいえるかもしれない。

先ほどみたように、ヴィトゲンシュタインは「われわれの言語においては、その基底にひとつの完全な神話がある」と考えていた。そしてタウシグはその言葉に大きな影響を受けてきたことを認めている。ヴィトゲンシュタインの断定を受け入れるべきかどうかはさておき、タウシグが問題としているのは、究極的に言えば、〈言語によって何かを説明するとき、それは魔術的であることを避けられない〉ということだということにはできるように思える。そしてタウシグは、文化人類学がそのことを無視して、魔術をあたかも「脱魔術化」できるかのように振る舞ってきたことに非常に敏感なのである。タウシグは「コーン・ウルフ」の最後の部分でこう述べている。

私はずっと、農業ビジネス的記述は今までありえた魔術よりも魔術的であり、必要とされているのは農業ビジネス的記述で主張されるリアリズムに、対抗魔術としての厄払い的な [apotropaic] 記述によって抵抗することであると感じてきた。厄払いというのは古代ギリシャ語から来ていて、危険な魔術から誰かを守るための魔術の使用を意味する。これはヴィトゲンシュタインによって言及されていたウルフイングな動きの中で前もって示されていたものだ。逸らすために真似をする中国武術のように、他のものに対抗する動きのことであ

¹⁴⁰ Taussig 2010. p. 30–31.

る。¹⁴¹

ハースの言葉を借りてこのことを繰り返せば、「我々の言語に内在する神話および魔術と共謀することで、タウシグは彼自身の手で、文化人類学的なテキスト実践の、魔術に抵抗するような魔術に抵抗する対抗魔術をおこなっている」¹⁴²のである（図 4）。タウシグがおこなっているのも対抗魔術なのだが、それは「厄払い的な記述」として、「農業ビジネス的記述」とは区別されている。これはすなわち、伝統的な文化人類学の記述について記述するとき、同じ記述の伝統に従うことを避けるため、あらゆる

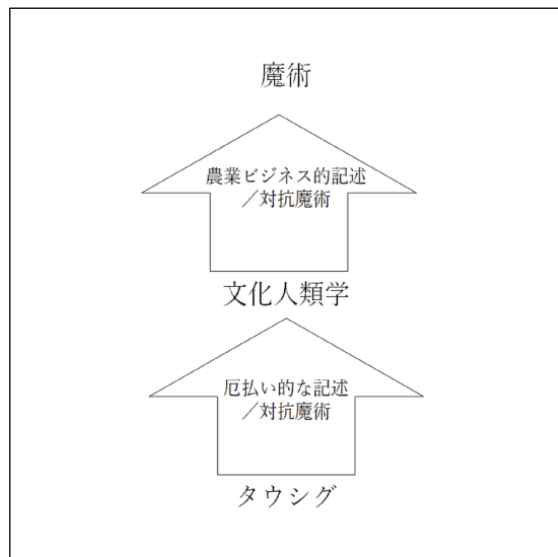


図 4

記述的な策略を駆使して抵抗する、ということだろう。そしてそれが成功しているかどうかというのは、その構造上、定量化できない。そのことを認めるように、ハースは「それは不誠実な態度で魔術の円環を破壊し、予測不能な螺旋に導く。おそらく制御不能だ」¹⁴³と述べている。

こうした「コーン・ウルフ」の内容を、ハースはナーヴァス・システムの記述の観点からも整理している。

究極的にいえば、タウシグのナーヴァス・システムの記述についての二重の用語法は、農業ビジネス的記述と厄払い的な記述が両方とも、同じ領野から出発した策略であるということ強調しているのだが、それぞれの策略はその手段とメカニズムを相当に異なる効果に対して適応する。農業ビジネス的記述は、以下の二重の意味でナーヴァス・システムを示す。第一に、それは秩序、システムをフィールドワークの実践の上に挿入する。第二にそれは、それが追い払った神話的魔法に先回りされ、混沌へと立ち戻る見通しに神経質になり、震える。それらの魔法を返還することは厄払い的な記述の目的であり、その記述はシステムの神経の末端において神経質さを救い出す。それは支配的な単一耕作の有害な作用を標的にした内部からの介入主義的な記述であり、そうすることによって、その力を異なるだけでなく救済的な方向へと与えることを望む。しかしながら、厄払い的な記述も同じく神経質な（システムの）記述である。第一に、それは系統的な神経質さを一般的な秩序に注入する跳躍的な記述であり、第二に、それは我々のテキストの実践のナーヴァス・システムを救済的な目的のために強調し、（再）配置するからである。¹⁴⁴

¹⁴¹ Ibid. p. 32-33.

¹⁴² Haas, p. 111.

¹⁴³ Ibid.

¹⁴⁴ Haas, p. 114-115.

ハースは農業ビジネス的記述と厄払い的な記述がナーヴァス・システムの記述に内包されると考えているが、ここではむしろ、ナーヴァス・システムへの親和性をもつ農業ビジネス的記述に対抗するために、ナーヴァス・システムの記述としての厄払い的な記述が求められている、と受け取るべきだろう。いずれにせよ、ここでもやはりナーヴァス・システムは、「支配のナーヴァス・システム」と「神経質に不安定なナーヴァス・システム」の間の緊張の中で揺れ動いている。タウシグは「ナーヴァス・システムの記述は規則なき規則を飛び越えるひとつの跳躍であり続けることを目指すが、同時にそれが破滅的な追求であることを知っている」¹⁴⁵と述べる。これは、政治的暴力の被害者への喪を表現するコロンビアの芸術家、ドリス・サルセドがあるインタビューで語ったことを思い出させる。

私はそれが不可能であることを知りつつ、政治的暴力からアートを作ることに尽力しました。暴力による死とは非道なものであり、それは表象の外にあると思います。それは象徴化から完全に逃げてゆくのです。私は自分のしていることが無駄であると知っています。¹⁴⁶

だが、サルセドもタウシグも作り、語り続ける。ストーリーテラーたちが紡いできた大きな鎖に飲み込まれないように。常にその鎖の端にいるように。

6 引用と理解

以上でタウシグの記述をナーヴァス・システム、民族誌とフィクション、民族誌と日記、フィクトクリティシズムの観点からみることはできたと思われる。だがここで、大きな問題が浮上する。タウシグについてこうして語っている〈私〉は、一体何をしているのだろうか。これはタウシグの営みに対する農業ビジネス的論文なのだろうか？ あるいはそうかもしれない。だとすればそこから逃れるために、ここで私のフィクトクリティシズム的な文章をひとつ記しておく必要があるだろう。だが同時に、その文章が十分にフィクトクリティカルなものであるかを評価する必要がある。そのため、この章では以下の手順を辿りたい。まず、ハースが提示するフィクトクリティカルな文章の特徴をまとめる。次に、その特徴が妥当なものであるかを、ハースの言及していないタウシグの文章、「アメリカを構築すること」との比較によって検討する。その後、私の文章を提示する。そして、私の文章とハースの提示する特徴との比較によって私の文章を評価する。

これは、ある意味フィクトクリティシズムを定義づけしているという点で、フィクトクリティ

¹⁴⁵ Taussig 2010, p. 32.

¹⁴⁶ Stoilas, Helen. "Doris Salcedo: silent witness." *The Art Newspaper*, <https://www.theartnewspaper.com/feature/doris-salcedo-silent-witness>.

カルな営みではないかもしれない。だが文章を提示して〈これが私のフィクトクリティシズムです〉と言い張るだけでは、あまりに投げやりであろう。よって私は、自身の文章を反省的に評価する実験であるという点で、本章すべてをフィクトクリティシズム的文章であると主張したい。

ハースはフィクトクリティカルな記述が定義づけ不可能であることを強調したうえで、その特徴をまとめている。ハース自身は特徴に番号を振っていないが、本論文では便宜上、通し番号を振ることとする。第一に、(1)「一人称単数の主観的なパースペクティブを選択すること」が挙げられる。これは学問的な三人称的記述に対抗するもので、タウシグの多くの著作に当てはまるといえる。第二の特徴は、それが(2)「しばしば最小限のキャラクター化と対話しか重視しないこと」であるとされる。これは、ある枠組みを作って、その中で思考実験を行うことが多いということを意味する。ハースはこの例として、コロンビアのボゴタにある黄金博物館になぞらえたコカイン博物館を想定して記述が進む、タウシグの『私のコカイン博物館』を挙げている。第三に、(3)「断片化を志向する傾向がある」ことが挙げられる。これは、モンタージュ的な要素や写真の使用といった特徴も含む。ハースは写真の使用の例として、タウシグの「ヴァルター・ベンヤミンの墓標」を挙げている。第四には、(4)「しばしば、他のテキストの実験的な再読み込みや再記述を導く、読むことについての実施要項である」ことが挙げられる。これはおそらく世の中の多くのテキストにいえるので、あまり追求する意味はないだろう。第五に、(5)「テキストの曖昧さ」が挙げられる。これは、学問的記述から逃れようとするフィクトクリティカルな記述には当然つきまとう特徴だろう。第六、第七の特徴は先に言及した、(6)「自己反省的転回」、と(7)「テキスト的遂行性」である。テキスト的遂行性とは、「テキストを、それが主張することの例示にすることを目指す」ような営みであるとされる。この両者の例には、タウシグの「コーン・ウルフ」が挙げられている。先ほどもみたように、「コーン・ウルフ」は自身のテキストを含めた人類学的記述について反省しながら、その記述自体が「厄払い」となるように構成されていた。

これらの特徴は、タウシグの他の文章の多く、たとえば第3章でみた「アメリカを構築すること」にも当てはまるのではないだろうか。まずこの文章は発表者としてのタウシグを起点に語られるため、ほぼ(1)に当てはまる。また、架空の資料館における架空の館長との語らいの回想という枠組みの想定は、(2)にあてはまる。(3)について、この文章は『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』原著で約34ページの分量があるが、それが、ひとつの前置きと、小見出しのついた16の文章に分けられている。このことから、タウシグが意図的な断片化のために、かなり細かく文章を区切っていることが分かる。(4)については先ほども述べたように追求しない。(5)については判断が難しいが、いわゆる学術的な体裁の文章ではないという点ではそういえるだろう。(6)については、タウシグがミゲルという分身をつくりだし、彼の行動について反省的に言及していたことを思い出したい。(7)については、図2を思い出したい。「アメリカを構築すること」では、タウシグが描き出すサパタからミゲルへの詩の伝達が、タウシグから読者への文章の伝達と共振することが企図されていた。これは、サパタの営みを遂行的に読者に伝える試みであるといえるだろう。以上のことを「コーン・ウルフ」に登場した言葉で言い換えるなら、「ア

「アメリカを構築すること」では、タウシグがサパタのことを対抗魔術によって脱魔術化して読者に伝えるという農業ビジネス的な記述は避けられ、タウシグの分身であるミゲルがおこなっている対抗魔術に対する、自己反省的な厄払いの記述が試みられている、といえるのである。

以上から、ハースの提示するフィクトクリティカルな文章の特徴は、ある程度の妥当性をもつものであると考えられる。では、以下に私の文章を提示する。

「引用と理解」

I

タウシグはヴァルター・ベンヤミンの引用に対する態度について、「彼は自身の仕事における引用を、道路の際に隠れ、読者から[物事に対する]確信を奪おうと目論む追剥とみなしていた」¹⁴⁷と書いたことがある。私はこの部分をいたく気に入っているが、そもそも引用とは何なのだろう。その問いが大きすぎるとすれば、私にとって引用とはなんなのだろう。

II

私は2018年8月25日から今日に至るまで、タウシグの文献からの引用文をFacebookに毎日アップし続けている。同じ本を数日続けて読むこともあれば、なんとなく開いたページから引用を探すこともある。タウシグについての修士論文を書き終えた時点でやめようと思っていたが、結局、今のところやめるつもりはない。というのも、それは完全に私の生活の一部となっており、一日の終わりにタウシグの本を開かない、という状況をあまり思い描けないのだ。それは今や研究のための読書というよりも、散歩のように日々の習慣となっている。

だから私は、どこに行くにしてもタウシグの本を携えることになる。2018年の8月から行った場所を思い返せばきりが無いが、中国の貴州省にも、マニラにも、シンガポールにも、二度目の貴州省にも、私は彼のペーパーバックとともに旅をした。

III

マニラに行ったとき、私はイントラムロスという街を歩いていた。その名前は「壁の中」を意味する。そこは確かに壁に囲まれた場所だった。もともと、イントラムロスはスペイン人がマニラで最初につくった街だ。街の中はスペイン時代の趣を多く残している。そして、日本軍による傷跡も。

歩くたびに観光ガイドから声を掛けられる。その連続に、私は少し参っていた。人通りの少ない場所に移動したとき、私は快活そうな壮年の男に声を掛けられた。無視して歩いても男はついて来て、彼を振り切るためには何か会話をしなければならぬのだと3月のマニラの暑さは囁いた。

¹⁴⁷ *Defacement*, p.45.

「こんなところで歩いてちゃ危ないぜ。俺がガイドしてやるよ」

そうやってのける男——Jに、私は価格の交渉をする。30分350ペソぽっきり。それ以上はない？ もちろん。これがすべてだ。

そんなはずはないのだけれど、そのときの私は彼の言葉を信じ、案内を頼むことにした。

「相棒とランボルギーニを呼ぶよ」

彼はそう言ってスマホで連絡を取り始めた。やってきたのはポニーテールにサングラス姿の若い男。彼が乗ってきたのはもちろんランボルギーニではなく、ホンダのロゴのついたサイドカー付き自転車だった。ホンダがサイドカー付きの自転車を出しているのだろうか？ そのときの私はそんな疑問も抱かず、Jと一緒にサイドカーに乗り込んだ。

Jは有能なガイドだった。よどみなくそれぞれの建物の歴史的背景について説明してくれるし、私がひとりで散策したりお土産を選んだりする時間もくれる。うるさくないくらいのタイミングで、軽快にスマホを預かって私の写真を撮ってくれる。

それに、相手が日本人だからといって日本軍の非道について隠したりしない。

ある場所に来たとき、Jは神妙な面持ちで立ち止まった。

「俺はここが苦手なんだ」

そう言う彼の視線の先には、発掘された古代の墓地を思わせる窪地があった。そこには墓石はなく、さらに言えばそれは墓ではなかった。

「この淵に沿って多くのフィリピン人が並ばされ、日本兵に銃殺された。俺はここに来たら鳥肌が出ちまうんだ。ほら」

そう言って彼は腕を見せた。そこには確かに鳥肌が立っていた。

おそらく、死体の処理が簡単という理由でここを銃殺の場所を選んだのだろう。

第二次世界大戦時、日本軍はマニラにいる市民のほとんどをゲリラとみなし、惨殺した。イントラムロスでも、多くの虐殺が起きた。

「今の日本人に恨みはない。俺たちは友達だ」

Jは言う。ああ、友達だと私は言った。

IV

「マニラはさ、ちょっと前まではこんなに平和じゃなかった。ガイドをするときは、ネックレスを外せてよく言ったものさ。そんなもんぶら下げてたら、通りすがりに引きちぎられるんだ」

ランボルギーニに乗って通り過ぎる景色の中、Jは言った。

「昔、俺はそっち側だったんだ」

「そっち側」

「観光客を襲う側」

あまり観光ガイドにふさわしくない話題を、Jは飄々と続ける。

「これ見てくれよ」

そうして彼はハーフパンツの裾をまくり、豪快なタトゥーを見せてくれる。

「でも俺にも娘ができてさ。それじゃいけないと思って強盗をやめたんだ。娘を学校にやらなきゃいけないかったし」

「そりゃ立派だね。それに良いタトゥーだ」

私は人がタトゥーを見せてくれたときには無条件で褒めることにしている。タトゥーを入れるという決意自体に賞賛を贈りたいし、単純にそれ以外の反応を思いつかないからだ。

高校生の頃のある一コマを思い出す。

私は写真部に所属していて、それなりに旺盛に活動していたので、他校とのワークショップに参加してどこかで撮影会をするというような機会がままあった。

そのとき、私は三重県のおかげ横丁という伊勢参りの宿場町を模した界隈で仲間とはぐれ、ひとりであらゆる歩いていた。

そんな私に、地元の若い三人組の男が声を掛けてきた。私が首からさげた一眼レフを見て、中心にいた男が写真を撮ってくれと言ってきた。私はカツアゲされたら嫌だなと思いながら、いいですよと言ってカメラを構えた。

男はカメラを前に袖をまくり、見事なタトゥーを見せる。私が「おー、かっこいい」と言うと、男たちは満足そうに笑った。たぶんそれが、誰かのタトゥーを褒めた最初だろう。

それで済めば良かったのだが、男はもう一枚写真を撮れと言う。で、もう一度袖まくり。私が今度は何も言わずシャッターを切ると、「かっこいいって言えよー」と不満そうだ。

私は「ヤンキーとカメラ小僧」という愉快なロールプレイが急に破綻した気がして不快に思いながら、適当にその場を離れたのだった。

V

ランボルギーニの旅の終わり、屋外にあるちょっとした憩いの場、バー兼食堂のようなスペースで、Jと一緒にビールを注文する。

カウンターには京都に住んだことがあるという笑顔の女性。自転車をこいでいたクールガイは、どこかへと消えてしまった。

「どうだった？ 今日の旅は」

「いやあ、最高にクールだったよ」

とは言ったものの、私はビールを呷りながら考える。

上手くいきすぎてる。

私とJの「有能なガイドと観光客」という関係は、どのような終局を迎えるのだろうか。その考えから逃れるため、私はビールを飲む。

別れ際、けっきょく私はJから、当初言われていた値段の三倍ほどの額を請求された。そのときの彼の顔からは、先ほどまでの快活な笑顔は消えていた。

VI

そんなことがあった日も、私はタウシグの本を読んでいた。マニラに持ち込んでいたペーパーバックは2018年発行の『パルマ・アフリカーナ』だ。その日、私がFacebookにアップした引用は、こうである。

書くことは書き直すことであり、だから私たちはスタイル、火花の輝き、魅力、速さを夢見るのだ。つまり、意思疎通することの必要や欲望として以上に、コミュニケーションとコミュニケーションする技巧的形式として、書くことを夢見るのである。¹⁴⁸

私は、Jとの邂逅について何度も書き直している。最初は手元のノートに書き、それをもとに修士論文の補遺を書いた。そして、それを大幅に削って書き直したものがこの文章だ。書き直す中で、私はコミュニケーションについて考える。伊勢で出会った三人の若者、そしてマニラで出会ったJと私の関係について。そしてJと私の関係の背景にある、日本軍による侵略と、現在まで続く、日本とフィリピンの経済的不均衡について。

この日の引用が、書くこととコミュニケーションの関係についての文章だったのは、おそらく偶然だ。私は必ずしも、その日の気分と関連する文章を意図的に選んでいるわけではない。だが実際のところ、毎日の習慣としてタウシグの文章を引用し、その総体からタウシグを理解してきた私にとって、〈私〉の経験と〈私〉のタウシグについての理解を切り離すことは不可能なのだろう。ならば、自らの経験を記述し、その日に引用したタウシグの文章と比べる、という私の試みは、タウシグを農業ビジネス的に理解しようとする自らへの、厄払いの記述となる可能性へと開かれている。そうは言えないだろうか。

あるときJと一緒に飲んだビールはレッド・ホース。

サン・ミゲル社の製品だった。

了

この文章は、ハースの提示するフィクトクリティカルな文章の特徴にどの程度あてはまるだろうか。まず、〈私〉という一人称を使用している点で(1)にあてはまる。次に、ほとんど私とミゲルとの遭遇だけに舞台が絞られているという点で(2)に当てはまる。また、断片化した短い文章の集積であるという点で(3)に当てはまる。(4)については前述の通り検討しない。(5)についても、(文章が未熟なだけかもしれないが)あてはまるといえるだろう。(6)については、いまおこなっている評価自体が、自己反省的なものだといえるだろう。

では、(7)についてはどうだろうか。この文章、そして本章が企図していることは、主に3点ある。第一に、この文章が第1章から第5章までの私の文章に対する厄払い的な記述となること。第二に、私とJとの出会いを「間文化的な転移の場」によって読者に伝えること。第三に、

¹⁴⁸ *Palma Africana*. p. 37.

これがフィクトクリティカルな文章であることを提示することである。

第一の点については、文章の終盤に登場する「だが実際のところ、毎日の習慣としてタウシグの文章を引用し、その総体からタウシグを理解してきた私にとって、〈私〉の経験と〈私〉のタウシグについての理解を切り離すことは不可能なのだろう」という点が説明している。タウシグについて脱魔術的に説明しようとする私の記述は、私の日々の経験の集積を基盤としている。マリノフスキの日記のことを思い出し、その基盤を〈日記的なもの〉と改めて呼ぶこともできるだろう。私の記述における〈日記的なもの〉の存在を表面化させているという点で、この文章は私の記述の農業ビジネス性に対する「厄払い的な記述」だといえるのである。そしてその点で、この文章は遂行的であるということが出来る。

第二の点について、この文章では引用という行為そのものが、第4章の終盤で説明した対話の相手としての「精霊」の役割をはたしていることに注目したい。私は、マニラでのJとの対話から受け取ったものを直接的な形で読者に伝えているわけではない。それは、私と引用文との対話、あるいは私と自身の過去からの「引用」との対話が形成する「間文化的な転移の場」を介して読者に届けられる。ここでは、フィールドでの出来事が遂行的に表象されているといえるだろう。

第三の点については、すでに提示できていると信じたい。この文章自体が、そのフィクトクリティカルな動きを提示する、遂行的記述の試みなのである。

以上により、第6章はフィクトクリティシズム的なものであったということが出来るのではないだろうか。しかし、それで安心することはできない。ナーヴァス・システムはすでに私の文章を飲み込もうとしている。そこから逃れるため、私はまた書き続けるしかないのだ。

おわりに

本論文では、マイケル・タウシグの記述的实践についてナーヴァス・システム、民族誌とフィクション、民族誌と日記、フィクトクリティシズムという四つの観点からみてきた。「ナーヴァス・システム」とは恐怖や暴力を表象することの困難さや不可能性について熟考したタウシグが考え出した概念だった。〈絶えず無秩序に取り囲まれたかりそめの秩序〉と〈それによるシステムならざる支配のシステム〉としてのナーヴァス・システムについて書くには、ナーヴァス・システムを秩序に還元しないような記述の方法、「神経質で不安定なナーヴァス・システム」が求められた。しかしこれは、「永久に終わりの手前にあるもの」であり続けるという「破滅的な追求」でもある。そしてそうした追求が、タウシグの文章の中では変奏されながら、常に行われているのである。

たとえば「アメリカを構築すること」においてタウシグは、架空の資料館の架空の館長を登場させることで、フィールドでの出会いを遂行的に読者に提示することを試みていた。あるいはマリノフスキの日記についての議論のなかで、タウシグは〈日記的なもの〉を隠蔽することが脱魔

術化という対抗魔術につながることを示唆していた。

そうしたタウシグの営みを、遂行的な「テキスト的实践」であるフィクトクリティシズムという概念から評価することも可能であった。ハースがフィクトクリティカルな文章として高く評価する「コーン・ウルフ」の中でタウシグは、魔術的なものを脱魔術化する対抗魔術に対抗するための「厄払い的な記述」について説明していた。この厄払い的な記述もまた、かりそめの秩序化に抵抗するための「ナーヴァス・システムの記述」であった。

こうしてみるとやはり、タウシグは自らの著作において「永久に終わりの手前にある」ことを有言実行しているといえるだろう。第6章では、私もまたそのことを試みた。エスノグラフィーとフィクションの関係という難題を相手取るためには、ナーヴァス・システムに飲み込まれないよう、そうして書き続けるしかないのである。

謝辞

この場を借りて、本論文のもとになった修士論文の査読をつとめてくださった管啓次郎先生、副査をつとめてくださった倉石信乃先生、鞍田崇先生、修士論文の執筆に関してたくさんの助言をくださった前嶋西一馬様、金子遊様、陣野俊史様に改めてお礼を申し上げますとともに、エスノグラフィーとフィクション研究会においてコメントをくださった横道誠様、成原隆訓様をはじめとする皆様にも心よりお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

参考文献一覧

この一覧は、英語文献、ドイツ語文献、日本語文献の順に並び、文献にはウェブサイトを含む。各英語文献と各ドイツ語文献は著者アルファベット順、各日本語文献は著者五十音順に並び、それぞれについて同一著者の文献は発行年代順に並んでいる。また、著者の不明な英語ウェブサイトについては、見出しのアルファベット順に英語文献の末尾に記載している。英語文献とドイツ語文献のうち、引用の際に既存の邦訳を参考にしたものについては末尾にその邦訳の書誌情報を記載した。

【英語文献】

Clifford, James. "Introduction: Partial Truths." *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, edited by James Clifford and George E. Marcus. U of California P, 1986.
ジェームズ・クリフォード「序論——部分的真実」ジェームズ・クリフォード／ジョージ・マーカス編『文化を書く』（春田直樹／足羽与志子／橋本和也／多和田裕司／西川麦子／和邇悦子訳、紀伊国屋書店、1996年）

- Deleuze, Gilles and Guattari, Félix. *A Thousand Plateaus: Capitalism and Schizophrenia*, translated and foreword by Brian Massumi. U of Minnesota P, 1987. ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ『千のプラトー——資本主義と分裂症』（宇野邦一／小沢秋広／田中敏彦／豊崎光一／宮林寛／守中高明訳、河出文庫、2010年）
- Eakin, Emily. “Anthropology's Alternative Radical.” *The New York Times*. 2001, <https://www.nytimes.com/2001/04/21/arts/anthropology-s-alternative-radical.html>.
- Firth, Raymond. “Introduction.” *A Diary in the Strict Sense of the Term*, pp. xi–xix.
- Haas, Gerrit. *Fictocritical Strategies, Subverting Textual Practices of Meaning, Other, and Self-Formation*. transcript Verlag, 2017. *Google Play*, <https://play.google.com/store/books/details?id=vUAaDgAAQBAJ>.
- Leach, Edmund. “Malinowskiana: on reading a diary in the strict sense of the term: or the self mutilation of Professor Hsu.” *RAIN*, No. 36. 1980, pp. 2–3.
- Levi Strauss, David and Taussig, Michael. “The Magic of the state: An Interview with Michael Taussig.” *Cabinet*, Immaterial Incorporated, <http://www.cabinetmagazine.org/issues/18/strauss.php>.
- Malinowski, Bronislaw. *A Diary in the Strict Sense of the Term*. Stanford UP, 1989. マリノフスキー『マリノフスキー日記』（谷口佳子訳、平凡社、1987年）
- Rousseau, Georg S. *Nervous Acts: Essays on Literature, Culture and Sensibility*. Palgrave Macmillan, 2004, p. 67.
- Stoilas, Helen. “Doris Salcedo: silent witness.” *The Art Newspaper*, <https://www.theartnewspaper.com/feature/doris-salcedo-silent-witness>.
- Taussig, Michael. “Rural Proletarianization; A Social and Historical Enquiry into the Commercialization of the Southern Cauca Valley, Colombia(Doctoral dissertation).” Retrieved from British Library EThOS. (Accession ID. uk.bl.ethos.474605) 1974.
- . *Shamanism, Colonialism, and the Wild Man: A Study in Terror and Healing*. U of Chicago P, 1987.
- . *The Nervous System*. Routledge, 1992.
- . *Mimesis and Alterity*. Routledge, 1993. マイケル・タウシグ『模倣と他者性——感覚における特有の歴史』（井村俊義訳、水声社、2018年）
- . “The Construction of America: The Anthropologist as Columbus.” *Culture/Contexture: Explorations in Anthropology and Literary Studies*, edited by E. Valentine Daniel and Jeffrey M. Peck, U of California P, 1996, pp. 323–356. (Taussig 1996)
- . *The Magic of the State*. Routledge, 1997.
- . *Defacement: Public Secrecy and the Labor of the Negative*. Stanford UP, 1999.
- . *Law in a Lawless Land—Diary of a “Limpieza” in Colombia*. U of Chicago P, 2003.
- . *My Cocaine Museum*. U of Chicago P, 2004.

- . *Walter Benjamin's Grave*. U of Chicago P, 2006. マイケル・タウシグ『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』(金子遊/井上里/水野友美子訳、水声社、2016年)
- . *What Color Is the Sacred?* U of Chicago P, 2009.
- . *The Devil and Commodity Fetishism in South America*. U of North Carolina P, 2010.
- . “The Corn-Wolf: Writing Apotropaic Texts.” *Critical Inquiry*, Volume 37, Number 1. 2010, pp. 26–33.
- . *I Swear I Saw This: Drawings In Fieldwork Notebooks, Namely My Own*. U of Chicago P, 2011.
- . *The Corn Wolf*. U of Chicago P, 2015.
- . *Palma Africana*. U of Chicago P, 2018.
- . *Mastery of Non-Mastery in the Age of Meltdown*. U of Chicago P. 2020.
- “Cultura y salud en la construcción de las Americas : primer simposio internacional de cultura y salud : la cultura de la salud en la construcción de las Américas.” *SearchWorks catalog*, Stanford Libraries, <https://searchworks.stanford.edu/view/2974930>.
- “Michael Taussig.” *The European Graduate School*, The European Graduate School / EGS, <https://egs.edu/faculty/michael-taussig>.
- “Michael T. Taussig.” *Department of Anthropology*, Columbia University, <https://anthropology.columbia.edu/content/michael-t-taussig>.

【ドイツ語文献】

- Benjamin, Walter: „Über den Begriff der Geschichte“, in: *Gesammelte Schriften, Band I-2*. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1974 ヴァルター・ベンヤミン「歴史哲学テーゼ」(野村修訳)『暴力批判論——ヴァルター・ベンヤミン著作集1』(高原宏平/野村修編集解説、晶文社、1969年)
- Brecht, Bertolt: „Die Ausnahme und die Regel“, in: *Gesammelte Werke, Band 2*. Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1967

【日本語文献】

- 岩淵達治「第8巻作品解題」ベルトルト・ブレヒト『ブレヒト戯曲全集』8巻(岩淵達治訳、未来社、1999年)
- ヴィヴェイロス・デ・カストロ、エドゥアルド『食人の形而上学——ポスト構造主義的人類学への道』(檜垣立哉/山崎吾郎訳、洛北出版、2015年)
- ヴィトゲンシュタイン「フレーザー『金枝篇』について」(杖下隆英訳)『ヴィトゲンシュタイン全集』6巻(大森荘蔵/杖下隆英訳、大修館書店、1995年7版)
- 奥野克巳「再帰人類学」奥野克巳、石倉敏明編『Lexicon 現代人類学』(以文社、2018年)

- 金子遊「マイケル・タウシグの人類学と思想」マイケル・タウシグ『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』（金子遊／井上里／水野友美子訳、水声社、2016年）
- クリフォード、ジェイムズ／マーカス、ジョージ編『文化を書く』（春田直樹／足羽与志子橋本和也／多和田裕司／西川麦子／和邇悦子訳、紀伊国屋書店、1996年）
- クリフォード、ジェイムズ「民族誌における権力と対話——マルセル・グリオールのイニシエーション」『文化の窮状——二十世紀の民族誌、文学、芸術』（太田好信／慶田勝彦／清水展／浜本満／古谷嘉章／星埜守之訳、人文書院、2003年）
- 河野眞『ドイツ民俗学とナチズム』（創土社、2005年）
- 清水透『ラテンアメリカ500年——歴史のトルソー』（岩波現代文庫、2017年）
- 管啓次郎「対話によるエスノグラフィについて」『コロンブスの犬』（弘文堂、1989年）
- 関口時正「ブロニスラフ・マリノフスキーの日記をめぐって」『ポーランドと他者——文化・レトリック・地図』（みすず書房、2014年）
- 千代勇一「歴史」二村久則編著『コロンビアを知るための60章』（明石書店、2011年）
- タウシグ、マイケル『ヴァルター・ベンヤミンの墓標』（金子遊／井上里／水野友美子訳、水声社、2016年）
- 『模倣と他者性——感覚における特有の歴史』（井村俊義訳、水声社、2018年）
- 谷口佳子「マリノフスキー：『日記』と彼をめぐる女性達」『共栄学園短期大学研究紀要』第2号（1986年）55-72ページ
- チャップマン、ピーター『バナナのグローバル・ヒストリー——いかにしてユナイテッド・フルーツは世界を席卷したか』（小澤卓也／立川ジェームズ訳、ミネルヴァ書房、2018年）
- ドゥルーズ、ジル／ガタリ、フェリックス『千のプラトー——資本主義と分裂症』（宇野邦一／小沢秋広／田中敏彦／豊崎光一／宮林寛／守中高明訳、河出文庫、2010年）
- 長濱一真「非常事態／例外状態をめぐって——ベンヤミンとシュミット」『人間社会学研究論集』6号（大阪府立大学大学院人間社会学研究科、2011年）3-26ページ
- 野村修『ベンヤミンの生涯』（平凡社ライブラリー、1993年）
- フレイザー『金枝篇』3巻（永橋卓介訳、岩波文庫、1967年改訂版）
- ブレヒト、ベルトルト「例外と原則」『ブレヒト戯曲全集』8巻（岩淵達治訳、未来社、1999年）
- ベンヤミン、ヴァルター「歴史哲学テーゼ」（野村修訳）『暴力批判論——ヴァルター・ベンヤミン著作集1』（高原宏平／野村修編集解説、晶文社、1969年）
- 『一方通交路——ヴァルター・ベンヤミン著作集10』（幅健志／山本雅昭編集解説、晶文社、1979年）
- マリノフスキ、ブロニスワフ（B. マリノフスキー）『マリノフスキー日記』（谷口佳子訳、平凡社、1987年）
- 『西太平洋の遠洋航海者——メラネシアのニュー・ギニア諸島における、住民たちの事業と冒険の報告』（増田義郎訳、講談社学術文庫、2010年）